日新誠

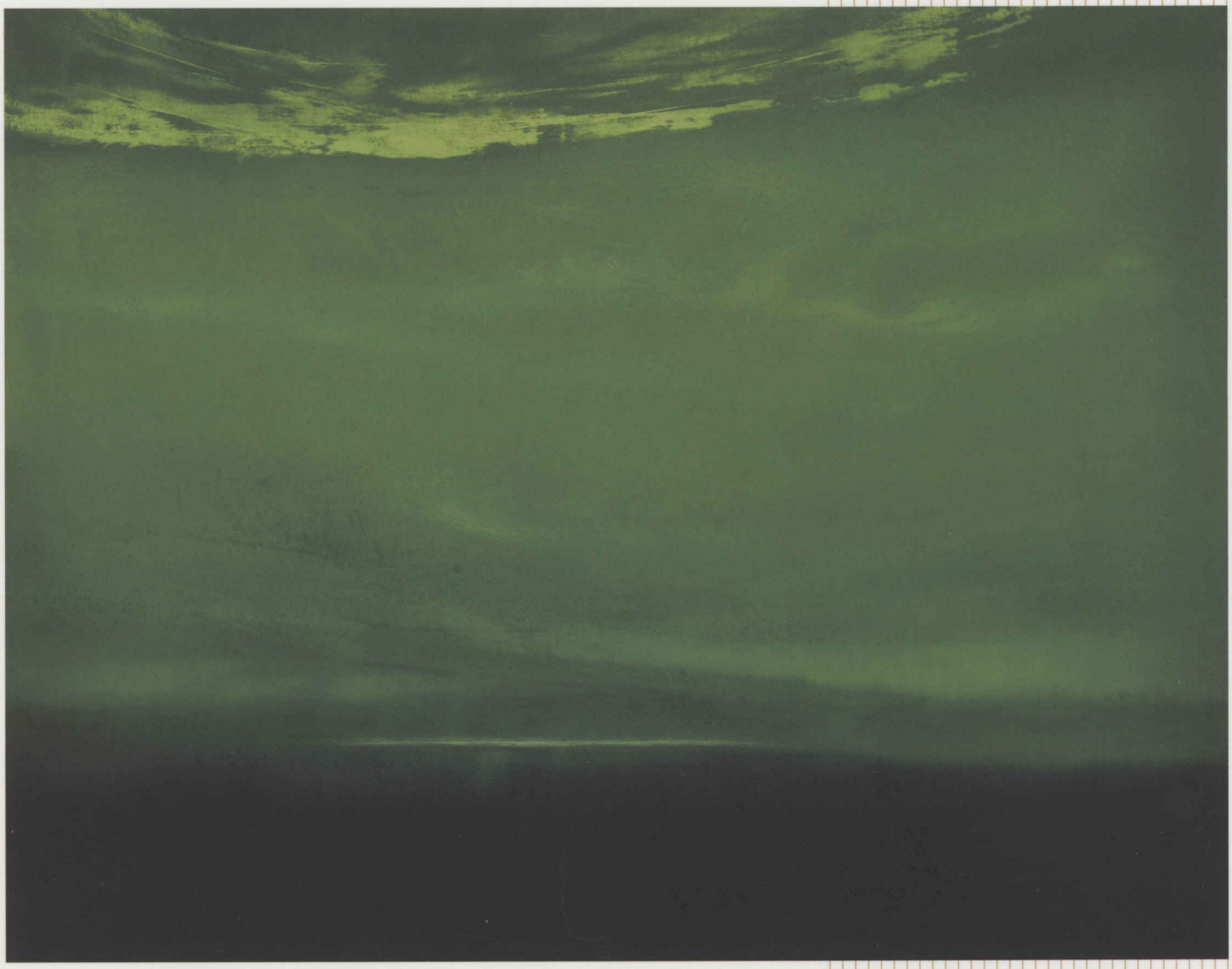
NISSHINSHO

夢をつなぐ

人生の夢の見つけ方・かなえ方

Your Destiny Dreams Come True

シンボルマーク
55dreams (go go dreams)



特集1 世界で活躍する甲府一高卒業生たち

特集2 伝統の「強行遠足」が、11年ぶりに甲府➡小諸間105キロ復活!!

- 『花子とアン』を100倍楽しむ〝花子と甲府〟
- おまんとう、へえ忘れちまっつら甲州弁!
- 先生。今、どうされていますか?
- 「生涯現役」という生き方

卒業生と在校生の絆を深める架け橋

55th甲府中学・甲府一高 2014年

東京同窓会記念誌 vol.21

POWER OF SPEED

POWER OF PARTNERSHIP

POWER OF INNOVATION

Silent MotorSports

Make New LEGENDS

―― そして我々が「日本の先端技術で新たな世界を」創造する。――

We develop new EV with "Perfect is not enough for the future"

"Japanese Technology makes new EV generation in the World"

株式会社 SMS

〒105-6027 東京都港区虎ノ門4丁目3番1号 城山トラストタワー27階
Tel. 03-5404-8914 Fax. 03-5404-8492 http://www.sms-ev.co.jp

代表取締役 清水 眞（昭和51年卒）

校　歌

山梨縣立甲府中學校校歌

作詞：三井甲之
作曲：東京高等音樂學院

一、我等は日本に生まれたり
神の御代より一系の
皇統戴く我國に
生まれしことのうれしさよ
皇國の榮えは天地と
共に窮りなかるべし

二、大和島根に山めぐる
甲斐の國あり水清き
郷土の歴史顧みよ
我等の務め輕からず
見よや南に富士ケ嶺は
皇國の鎭めと聳えたり

三、大海原の搖りやまぬ
波をも風をも凌ぎつつ
護れ皇國を諸共に
國民擧りて國のため
撓まず萎縮まず辟易がず
進むぞ大和ごころなる

山梨県立甲府第一高等学校校歌

作詞：上条馨
作曲：小松清

一、甲斐の国　み中に建ちて
古へゆ　雄心伝へ
新しき　世の鑑とし
勉めてむ　この学舎に

二、日に新た　また日に新た
弥高き　のぞみをもちて
真なる　理究め
励みなむ　若人我等

三、聳え立つ　芙蓉の高根
清き哉　甲斐の山川
もろともに　玉と磨きて
賛くべし　天地の化育

東京同窓会会長
井上幸彦
（昭和三一年卒）

『日新鐘』に寄せて

「聳え立つ芙蓉の高根」と我らが母校、甲府一高の校歌三番に詠みこまれている富士山が、昨年ユネスコの世界文化遺産に登録された。そのせいもあってか、富士登山ブーム現象が顕著になった。山梨、静岡両県では登山者から入山料を徴収（任意）し、登山者の安全対策、環境の保全等に資することとした。いずれにせよ「世界文化遺産」としての富士山の景観等の保持には万全を期すことが求められる。

一方、「一高といえば強行遠足」と言われる程に、強行遠足は、一高のシンボリックなイベントだ。昨年は、ゴール地点を「小諸」にという長年にわたる復活要望の声に応えて、「ゴールは小諸」が実現した。

そのこともあってか、マスメディアがテレビ、新聞などで特番を組んだり、シリーズもので報道したりと、大々的に取り上げてくれた。私の警察関係者からも電話でわざわざ「総監（私のことをそう呼んでくれる）の母校は凄いですね。テレビを見ていて感動しました」と連絡をくれたりしたものだ。

在校中の最高のエポックメモリーとなるこの強行遠足を時が移り変わろうとも一高の伝統としていついつまでも守り、育てていって欲しいものである。

さて、今年の東京同窓会のメインテーマは「夢をつなぐ」ということだ。各方面で活躍している同窓生を紹介し、先輩後輩の絆を強める「縁（よすが）」としようという訳である。特に今年は、在校生にもこの『日新鐘』を配布し、一高に学んだ者としての絆をより一層深めようということだ。

今次同窓会の大盛会と併せて、母校の更なる充実発展を祈る次第である。

甲府第一高等学校校長
赤池亨

SGHに決定！

平成二十六年度甲府中学・甲府一高東京同窓会が盛大に開催されますことに、心よりお祝い申し上げます。

さて、本校は、文部科学省から、本年度から平成三〇年度までの五年間、スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）として指定を受けました。この事業は、急速なグローバル化の進展の中で、社会課題に対する関心や教養、コミュニケーション能力や問題解決力等の素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を目的に行われるものです。全国から希望があった二四六校の中の五六校に選ばれたものであり、本校にとっては、たいへん名誉なことであります。（※60ページ参照）

ここで、昨年度の母校の状況を簡単に報告しておきます。進路面では、国公立大学に延べ九九名、私立大学には延べ三六〇名が合格しました。また、体育局では、テニス部、アーチェリー部、弓道部、山岳部が県の代表として全国高校総体に出場するとともに、文化局では、新聞部、美術部、箏曲部、囲碁・将棋部が全国総文祭に出場しました。これも東京同窓会の皆様の変わらぬご支援、ご協力の賜物であると深く感謝申し上げます。「同窓会奨学金」へのご寄付や、「日新基金」の援助は、生徒の学業・文化及びスポーツ活動への大きな支えとなっており、重ねて御礼申し上げます。

総合選抜制度が廃止され、全県一学区制度が導入されてすでに七年が経過しました。昨年度の強行遠足の小諸復活、今年度のSGHの指定など、同窓会の皆様の変わらぬご支援を賜る中で、教育環境も整備されて参りました。我々、甲府一高職員はこの機会を有効に捉え、甲府一高の新たな飛躍に向け、職員全体が一丸となって、教育活動に邁進する所存であります。

東京同窓会の皆様のご理解、ご協力を重ねてお願い申し上げるとともに、益々のご発展と、ご健勝を祈念いたします。

平成二十六年度幹事長
保坂栄治
（昭和五一年卒）

ごあいさつ

ご来賓の皆様及び同窓生の皆様、お忙しい中、第五五回甲府中学・甲府一高東京同窓会にご出席いただき、誠にありがとうございます。また、『日新鐘』の作成、広告掲載等にご協力くださいました皆様、懇親会の企画等にご配慮くださいました母校の先生方、そのほか東京同窓会開催にご支援、ご協力くださいました大勢の皆様に対し、同窓会幹事一同、心より厚く感謝申し上げます。

さて、今回の東京同窓会のテーマは「夢をつなぐ」としました。この言葉には、年齢に関係なく個人的にいつまでも夢をつなぎ持ち続ける、世代から世代に夢をつなぐ、一人の夢を共有し合い、助け合い、また喜び合うといったいくつもの意味が含まれています。

そして、『日新鐘』には、「人生の夢の見つけ方・かなえ方」をサブテーマとして、これにちなんだ同窓生の皆様からの玉稿を掲載することができました。また、終点小諸が復活した強行遠足の特集を組んだほか、恩師の方々の近況や生き方のインタビューなど読み応え、見応えのある冊子が出来上がったのではないかと思います。

なお今回は、母校及び東京同窓会役員会のご了解を得て、『日新鐘』を在校生にも配布することになりましたので、在校生の皆様にも、先輩たちの活躍する姿を知っていただければと思います。

また、懇親会では、甲府中学・甲府一高の懐かしい映像をスライドでご覧いただくほか、母校にちなんだクイズコーナーを設け、景品を用意いたしました。本日の東京同窓会を、皆様がお互いの夢を尊重し、夢をつなぐ機会とし、また、旧交を深め、新たな出会いを見つける場にしていただけたら幸いです。

思いのビームを放とう！

組織のルールに外れる、
無能のレッテルを貼られる、
それで、すべての自信を
失っちゃいけない！

その会社でダメな奴は、
どこへ行ってもダメな奴だ、
そんな理不尽な脅迫に
屈してはいけない！

自分を信じること、
自分を愛すること、
これができたら、
神さまは思いもよらない方法で、
あなたに最高のプレゼントをくれる

天に向かって、思いのビームを発射しよう
思いのビームは、
あなたの自信の大きさだ
あなたという生命力の強さだ
あなたが発する生命（いのち）の躍動感だ

天に向かって、思いのビームを打ち込もう
そして、力いっぱい願おう
夢は必ず叶えられることを信じていたら、
奇跡は空からキラキラと舞い降りてくる

天に向かって、思いのビームを輝かせよう
今、生きていることに感謝して、
今、生かされていることに感謝して、
今、「在る」ということに感謝して、

すべての叶える力が自分の中にあることに、
自分の中に備わっている
「奇跡の力」に感謝しよう

何を見ても、誰と逢っても、
「ありがとう」の言葉しか見つからなくなったとき、
まわりの世界は驚くほど変わっているだろう

幸せや夢は、
そんな瞬間にあなたの部屋のドアをノックする

日新鐘部会長　遠藤励起

Profile
Reiki Endo
昭和51年卒。中央大学卒業後、いくつかの出版社で雑誌、書籍の編集を経験。編集者歴25年。手がけた書籍は約800冊以上、数々のベストセラー作家を世に送り出している。著書・編著に『幸せインストール』など。日本メンタルヘルス協会公認心理カウンセラー。現在、株式会社学研パブリッシング・総括編集長。

55th甲府中学・甲府一高2014年東京同窓会記念誌「日新鐘」・目次

山梨縣立甲府中學校校歌・
山梨県立甲府第一高等学校校歌……1
発行によせて……2
巻頭言 思いのビームを放とう！（日新鐘部会長 遠藤励起）……3

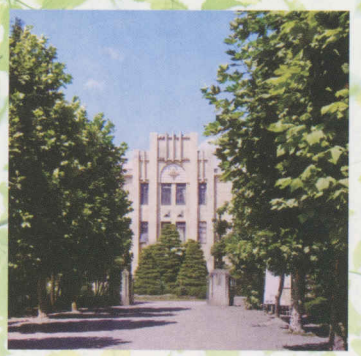
特集1
世界で活躍する甲府一高卒業生たち
未来の日本を担う一高生に贈る7人のメッセージ

01 Tatsugoo（アーティスト／プロデューサー）……6
02 望月詩史（同志社大学高等研究教育機構・助手）……7
03 仲田道弘（山梨県観光振興課長）……8
04 中込靖成（画家）……9
05 金丸徳雄（株式会社講談社取締役）……10
06 土橋八恵（出版社経営）……11
07 渡辺利夫（拓殖大学第十八代総長）……12

特集2
伝統の「強行遠足」が、11年ぶりに甲府⇒小諸間105キロ復活!!

Document 未来につなげたい一高生の夢……14
Topics 100人アンケート「あなたはお守り渡しましたか？」／身分証明書が検印カード／強行遠足新聞……17
Interview 長く続けるために、これから100年をどうするかという発想
（甲府一高体育振興係・中澤達彦教諭）……18

平成25年度 甲府一高この1年……21
【一紅会】夢をつないで十七年（一紅会会長・谷口百合子）……24
小河原正己氏講演会『「万葉集」は、古代人のドキュメンタリー』……24
『花子とアン』を100倍楽しむ〝花子と甲府〟……26
おまんとう、へえ忘れちまつつら甲州弁！……27
先生。今、どうされていますか？～恩師の方々から～
（高橋保明先生／石倉正身先生／小林仁一先生／浅川達雄先生／田中資時先生）……28
「生涯現役」という生き方（作家・水木亮＝望月弘美先生）……30
難病のこども達に〝生きる歓び〟を（小児科医・小口弘毅）……31
努力と継続は力なり（三菱重工業株式会社 プラント技術課主席技師・小宮山正仁）……32
「日新鐘」題字の人～米山啓水……32
広告……33
甲府一高が文部科学省から、平成26年度スーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定されました……60
幹事のひとこと……61
編集後記……62



表紙装画・シンボルマーク：中込靖成／題字：米山啓水

特集1

世界で活躍する甲府一高卒業生たち

未来の日本を担う一高生に送る7人のメッセージ

甲府一高の卒業生は、社会に出て、ほんとうに活躍している。それだけ、心身ともに優秀な人が多いということだ。今回の幹事である昭和51年卒は、卒業して40年になる。世の中的にはあと3年で定年である。65歳まで働く人もいるかもしれないが、ほんとうの意味で現役世代にピリオドを打つ。この40年を振り返って、いい人生だったのか、あらためて考える歳になった。

今回、この特集を通じて、もう一度おのれの生き方を再確認するとともに現役高校生には、多彩な先輩たちのメッセージを通して、これからの社会人人生への夢を大きく羽ばたかせてほしい。夢の実現への大きなヒントになるはずだ。

01
Tatsugoo

02
Shifumi
Mochizuki

03
Michihiro
Nakada

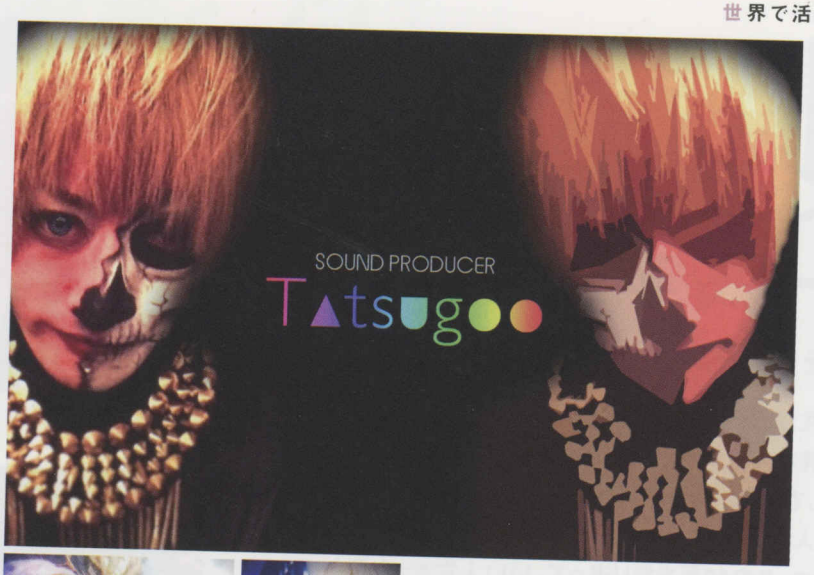
04
Yasunari
Nakagomi

05
Tokuo
Kanemaru

06
Yae
Dobashi

07
Toshio
Watanabe

Person 01 Tatsugoo



Profile

音楽ユニットFortuna〈フォルトゥナ〉のメンバーChaos〈カオス〉としてメジャーデビュー。その後、改名しアーティスト活動と並行して作曲家や編曲家としても活動し、2007年よりダンスミュージック・デュオRagdoll〈ラグドール〉のメンバー兼プロデューサーとして作曲、編曲、プログラミング、DJ、アートディレクションも担当している。2013年、現在はEDMベースに独自の尖った個性と世界観持ったレインボー・ポップ・アーティスト"SEIJ"をプロデュース。《代表作》KAT-TUN『Love yourself ~君が嫌いな君が好き~(2010)』(作曲)／TBS 金曜ドラマ「ヤマトナデシコ七変化♥」主題歌／浜崎あゆみ『HEAVEN(2005)』(共編曲)／映画『忍 SHINOBI』主題歌／May J.『Beautiful Days(2010)』(作曲／編曲)／メナード フェイシャルサロン TV-CMソング／Fortuna『ONE WISH(2004)』(作曲／編曲)／ゼスプリゴールドキウイTV-CMソング

Tatsugoo

(平成14年卒)
アーティスト／プロデューサー

夢は大きい方がいい

僕の仕事はひとことで言うと、「アーティスト／プロデューサー」ですね。「楽曲制作からはじまり、ファッション／アートワークに至るまでトータルでプロデュースし、ひとつのアーティストの世界を創り上げる仕事」です。

これまで、バンドでは主にアーティストとして自らフロントに立ちながら、パフォーマンスや楽曲制作をすべてこなして音を発信していく役割をしてきました。一方、作曲をしたKAT-TUN(カトゥーン)の曲「Love yourself ~君が嫌いな君が好き~」は、10分で書き上げた曲です。浜崎あゆみさんの「HEAVEN」の編曲は、自分がまだ20歳くらいの時に参加した初めての大きな仕事で、ある意味人生の転機にもなった思い入れのある曲です。

僕の高校生活を振り返ってみると、高校3年間の経験や友人は人生の中で重要な影響を与えてくれていたと思います。とにかく"普通"や"一般的"という考えが嫌いで、人と違ったことを見つけたりしたりするのが好きでした。自分のやりたいことが決まれば、自ずとそれに準じた勉強の仕方にもなっていきました。

勉強は文系でした。幼い頃から洋楽や洋画が好きで、英語が好きでしたね。それが高じて在学中は短期留学に行くこともできました。いまも作詞などでは英語を使うので、自分の仕事にもその時の経験や勉強での得意分野からつながっているんだと思います。ネイティブレベルの英語を高校生の時にもっと勉強しておけばよかったと反省しています(笑)。

高校時代の思い出は数え切れないほどありますが、やはり一高ならではの強行遠足や応援練習といったものが他の学校にはないようなイベントだったと思います。2013年に強行遠足105キロが復活したことは、本当にすばらしいことだと思います。とにかく「精神力」と「忍耐力」は、このとんでもなくクレイジーな行事のおかげで確実についたと思います。

寝ても覚めても音楽のことばかり考えていた

音楽を手がけるようになったのは、高校の時にシンセサイザーを買って、それを使いながら作曲を始めたのがきっかけです。好きな音楽は洋楽、その中でもとくに昔からダンスミュージック、いまで言うEDM(エレクトリック・ダンス・ミュージック)ですね。

アーティストはマドンナが好きです。彼女の唯一無二の存在感や、妥協ないパフォーマンス、エンタテインメントを極める姿勢と、同じことは二度せず最新のものを取り入れ、常に時代の第一線で活動するという一貫して徹底したスタイルを尊敬しています。

やはり自分が「好き」なものだと感じながら続けたり経験するということが、最終的に夢を実現するためのツールとして結びついているのだなと実感することができます。僕の場合は、寝ても覚めても音楽のことばかり考えていたのと、アーティストとして第一線で活躍し、自分の作品を世に送り出したいという思いが強くありました。

「自分の目指すエンタテインメントの世界に一番近いものは何か」と考えたときに、ちょうど開校したばかりの「エイベックス・アーティストアカデミー」の一期生になろうと考えました。そこで最初に独学でオリジナル曲を制作し、応募して合格したのが、今の仕事を目指す本格的な第一歩です。その後、アカデミーに入学してそこで音楽理論やDTM(デスクトップ・ミュージック)、アーティストプロデュースのノウハウを学びました。

皆さん、いつか共演しましょう

僕の仕事の場合、常に新しいプロジェクトや新しい作品に取りかかっているので過去はあまり振り返りません。新しいインスピレーションが命なので、とにかく自分の限界を常に超えることと、挑戦し続けて自分自身のクオリティを洗練させていくように心がけています。作曲やプロデュースはやはり、「自分でひとつの世界を作り出す」という醍醐味があります。今後は、最新のEDMサウンドを武器にした今までにないタイプの新人アーティストのプロデュースをしていく予定です。

"一高生へのエール"ですか？

夢は大きい方がいい。信じて決して途中であきらめず、かなえたいと思うならその道を極める努力を怠らないこと。結果は必ずついてきます。感謝の心も忘れずに。自分もまだ夢の途中なのでがんばります。僕と同じような夢を描いている皆さん、いつか共演しましょうね！

Person
02
Shifumi Mochizuki

恩師（写真右側。西田毅・同志社大学名誉教授）と中国・西安へ旅行の際に

望月詩史

（平成13年卒）
同志社大学
高等研究教育機構・助手

行動しないで後悔するよりも、行動して後悔しよう

もし私が、「あなたは昔から今の仕事をしたいと思っていたのですか」と問われるならば、躊躇なく、「否」と言い、同時に「やりたいことをやり続けていたら、今の仕事に辿り着いた」と答えるに違いない。

さて、私は同志社大学高等研究教育機構に助手として所属している。専門分野は政治思想である。馴染みの薄い学問かもしれないが、「政治思想」とは「『政治』（＝様々な利害を調整する機能）に関するまとまりを持った考え」（哲学ほど高度に体系化されていないが、感情のように一切体系を持たないものでもない）であり、「どういう考えに基づいて政治を行うのが望ましいのか」を探究する学問である。そして歴史上の政治思想に着目して、そこから今日的意義を汲み取るのが「政治思想史」である。中でも私は近代日本政治思想史をテーマとしており、10年近く取り組んでいるのが、石橋湛山の政治思想である。

石橋湛山との出会い

私が石橋を知ったのは、「一高祭」のクラス新聞班となり、「母校の著名人」欄を担当した時である（高校3年時）。「一高の卒業生の中に総理大臣がいたのか」と驚いたことを今でも鮮明に記憶している。大学入学後、『石橋湛山全集』（全15巻）の存在を知り、日々書庫に通って読み漁った。次第に石橋の思想を本格的に研究したいとの思いを強くした。そして「やりたいこと」をやり続けた結果、大学院に進学し、2012年3月に博士論文「石橋湛山の政治思想―思考方法から読み解く―」を書き上げ、また同年末に「石橋湛山の二つの《問い》」で「第1回石橋湛山平和賞」最優秀賞を受賞したのである。

私の研究は、「既存の石橋湛山の思想像に対する疑問」を出発点としている。というのも、それらがあまりに理想化されており、また現代的な問題関心に引きつけて理解されがちで、実像とズレが生じていると感じたからである。その上で、石橋の思考様式に着目してその再検討を行った。例えば石橋の大正期における普通選挙論や特権階級批判、あるいは反帝国主義論や軍備撤廃論といった言説の背景には、これらを生み出す思想や哲学が深く作用していると考えたからである。またそこには、今日我々が抱える数多くの問題を解決するための手掛りが含まれていると見込んでいたからでもある。

そこで試行錯誤を繰り返しながら論文を書き上げた。もちろんこれは通過点に過ぎず、決して終着点ではない。むしろ博士論文を書き上げて、やっと研究者としてスタートラインに立つ資格を得たと表現した方がよいかもしれない。

絶え間ない「選択」が、「生きる」実感

「やりたいこと」をやり続けるのは、何かしらの犠牲を伴う。長期的に見れば、大学を卒業して就職する方が様々な安定を手にできる可能性が高い。しかし、「やりたいこと」ができるならば安定を犠牲にしても構わない、と思えるものもあるはずだ。私にとって研究者の道はまさしくそう思えるものである。

人生は常に「選択」を迫られる。その意味では、「生きる」ことは決して楽ではない。けれども絶え間ない「選択」が、人に「生きる」ことを実感させているのも事実だろう。高校時代にも、卒業後をめぐる一つの「選択」を迫られる。ただしその「選択」が、その後の人生を決定づけるものではない。次々と「選択」の機会が訪れる。それ次第で人生は大きく変えられる。

だから「やりたいこと」があるならば、躊躇なくその道を「選択」してほしい。そして「できること」ではなく、「やりたいこと」を前提に「選択」しよう。「できること」を前提にしてしまうと、自分を枠にはめてしまい、さまざまな可能性を自ら閉ざしてしまうからである。

漠然としていてもかまわない。さまざまな条件も考えなくていい。「やりたいこと」があるのであれば徹底的に突き詰めよう。行動しないで後悔するよりも、行動して後悔しよう。

Profile
2012年同志社大学大学院法学研究科政治学専攻博士後期課程修了（政治学博士）。大阪商業大学非常勤講師を経て、現在同志社大学（高等研究教育機構）助手。2012年「石橋湛山の二つの《問い》」で「第1回石橋湛山平和賞」最優秀賞を受賞。

Person 03
Michihiro Nakada

「ロンドンの日本大使館でのワインプロモーション」

仲田道弘

（昭和53年卒）
山梨県観光振興課長

夢をつなぐキーワード『自分自信』

「世界の食の流れはヘルシーへ。料理に合わせてワインも赤から白へ。そして軽い白ワインへ。甲州ワインは今こそ必要」

ロンドン在住の著名なワインジャーナリストのジャンシス・ロビンソン女史は、2009年から始まったロンドンプロモーションで甲州ワインをこのように評価した。今年で5年経過して、いよいよ甲州ワインの輸出が本格化している。

山梨のワイン振興に携わって25年。最初は甲州ワインを世界に出すという夢は、夢でしかなかった。

そんなときに私は、1冊の本を執筆した。地場産業の5人の経営者をインタビューした本だ。タイトルは『自分自信』。5人の生き方から導き出されたキーワード、「自分」と「自信」の造語だ。

「夢の実現。そのためには、誰よりも自分自身がその夢の実現を信じ続けること」

『美味しんぼ』取材が転機に

こんなとき、偶然に一つの転機が訪れた。

1999年グルメ漫画の草分けといわれる『美味しんぼ』原作者の雁屋哲さんが、山梨に取材に訪れた。このときに雁屋さんは、甲州ワインの本質を見抜き、それまでワインと和食との相性は良くないと言っていた主張を180度転換。甲州ワインと和食の相性の良さを、100万部発行の漫画『美味しんぼ』で7週連続取り上げていただいた。（イラスト参照）

雁屋さんは、日本料理の原点である「味噌、醤油、米酢、味の濃い魚」とワインとの相性に疑問を持っていた。特に生魚とワインを一緒に口に含むと、嫌な生臭さが増幅するとのこと。しかし甲州ワインは、世界で唯一この生臭さを増幅しないワインであるとの結論であった。後日このことは、メルシャンの研究者によって科学的に証明されることになる。

和食との相性でシャルドネなどを逆転

甲州ワインの特徴を上手に表現できなかった私たちであったが、このときから和食との相性でマーケット開拓ができるようになった。そしてその延長線上に、今のロンドンマーケットへの進出がある。

実は甲州は、ワイン用の葡萄としては、シャルドネやソーヴィニヨン・ブランなどの品種に比べ、劣るとされてきた。そのため大手ワイナリーは、新酒ワインブームが去った時に、あっさりと甲州葡萄を使わなくなった。しかし、小さな地場ワイナリーが諦めずに甲州ワインを造り続け、品質を高めてきたおかげで、甲州は生き延びてきた。そして和食との相性では、今ではシャルドネなどを逆転するところまできた。

人生のどこかで必ず幸運の女神は微笑む

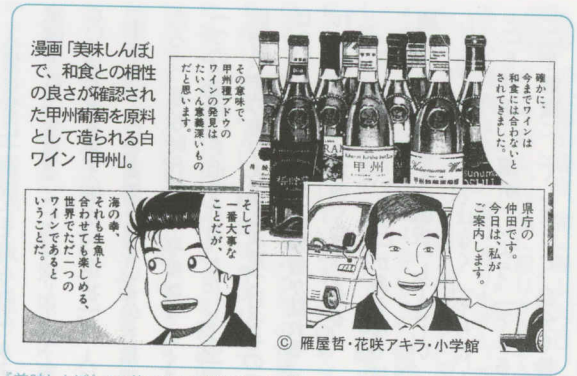
人生のどこかで、必ず幸運の女神は微笑む。その時に、その微笑みに気がつき、最大限の無理ができるかが、夢の実現の分岐点となる。

若い皆さんにもう一度言おう。

夢の実現――。

そのためには誰よりも自分自身がその夢の実現を信じ続けること。

新鏡



漫画「美味しんぼ」で、和食との相性の良さが確認された甲州葡萄を原料として造られる白ワイン「甲州」。
© 雁屋哲・花咲アキラ・小学館
『美味しんぼ』での仲田さんの登場シーン（仲田さんの名刺裏より）

Profile

1982年筑波大学卒業後、山梨県庁入庁。89年三井物産（株）派遣研修。翌90年から20年以上にわたりワイン産業の振興に携わる。山梨のワインを「品質」「マーケティング」「デザイン」「観光」「地域ブランド」の視点から推進してきた。ブランド推進監、東京事務所広報官を経て現職。著書に『自分自信』（99年）『おもてなしの達人』（2003年）がある。

Person
04
Yasunari Nakagomi

Profile
1984年東京造形大学絵画科卒業。2007～2008年文化庁在外派遣研修員（カリフォルニア州立Bakersfield大学研究員）山梨県立美術館ほかに作品収蔵。最近では、米国カリフォルニア州The Clark Center for Japanese Art and Culture、ミネソタ州Minneapolis Institute of Arts、タイ国バンコク市The Queen's Gallery等に収蔵されている。

works of art

Empty Sky 911th 05（上）
Landscape #0032（下）

イタリア・ナポリの個展会場の献納作品前で

中込靖成

（昭和51年卒）
画家

美術を志すことのおもしろさや夢

表 紙の絵「Landscape#1065」は、中込靖成さんが描き続けている一連のシリーズの最新作だ。空？　海？　何が描かれていると思いますか？

渡米時の葛藤と技法の変化

中 込は、2014年4月から3ヵ月間、イタリアのナポリに招待されている。何枚かの絵の制作と個展の開催が目的だ。これまでにも山梨県立美術館ほかに作品が収蔵され、2009年にタイ、2013年にアメリカの美術館等に作品が収蔵されている。それはどこが評価されているのだろうか。

　当初は、ずっと抽象画を描いていた。山梨県立美術館学芸員（現在千葉大学准教授）の神野真吾は、2005年の展覧会時に以前の彼をこう評している。

「数年前の彼は『ミニマル・アート』の画家であり、『シェイプド・カンヴァス』の画家であった。2002年、彼が口サンゼルスに向かったのは、日本での型どおりの表現活動に別れを告げ、それまでの他律史的な自分の存在を、自立した表現者と変えるためであったのだろう」

　その時の葛藤と技法の変化を、中込は自らの文章でこう振り返る。

――現代美術の拠点であるアメリカで創作活動をする中で、私はそこの人々とは違う、日本人である自分が西洋の上着だけを着てもフィットするはずがないと気付いたんです。それはアメリカに渡ったからこそ感じることができた思いです。

――何もかも忘れて夢中になって描いていると、絵の具のにじみの中に風景のようなものが見えたんです。後になって気付いたんですが、それは私が幼い頃に祖母に手を引かれて歩いた、生まれ育った地の風景でした。

――滞在する中で私は新たなテーマ、「Landscape」と出会い、それが今日まで続いている。

水墨画に近い抽象風景画

「Landscape」のごく初期の作品「Landscape#0032」と、2001年9月11日の事件に感応した「Empty Sky911th05」を観ていただきたい。抽象画のようにも見えるが、風景画にも見える。

　これらは、アクリル絵具や油絵具をカンヴァスや紙の上に塗り込めて、それを刷毛やへらなどで削っていくことによって描かれている。それは彼が抽象画を描いている時から一貫した手法なのだという。

――手を動かしている間に景色のイメージが出てくる。自分にとって気持ちいいものに近づいてくると、それは山梨、田富の実家周辺や甲府盆地の原風景になっている。自分の山梨の風景の記憶に近いんです。

――原点に戻っていくと、写実的ではないけど具象になった。だから、Abstract Painting＝抽象画ではなく、Abstract Landscape＝抽象風景画。どちらかというと水墨画に近いんです。

　面白いのは、この絵を観た人たちの反応だ。アメリカでの展示会では、緑色と黄色の最近の大作を見て「自分はここで育ったんだ」と叫んだイエローストーン出身の白人がいたという。

――絵を観た観客は、人種も育った地域もさまざまでしたが、誰もがみな「この絵が持っている何かが自分の幼い頃の記憶を触発する」と同時に、「この風景の絵にはおまえのオリジナリティがある」と言われたんです。アートは言葉や歴史、背景を超えてコミュニケーションできるすごいものだと感じましたね。

――「アーティストとは単に職業ではなく生き方である」と思っています。常に自己を凝視し続ける上で、出自である「原風景」が重要になってくるのです。

絵に人生をかけても悔いはない

中 込の本格的な美術との出会いは甲府一高1年の時。幼いころから絵を描くことは好きだったが、美術の須藤獏（ばく）先生との出会いが彼の人生を決定づけた。

――美術を志すことのおもしろさや夢を与えてくれたのが獏先生です。美大をめざして浪人することを決めた時、獏先生に『絵描きは一生貧乏だぞ、苦労するぞ、でも芸術を一生の友としてやっていけたら有意義な人生だ』と言われたことをよく覚えています。芸術とは生涯をかけて追い求めて行く世界。絵に人生をかけても悔いはないと、その時に思いました。

　かつて抽象画時代の中込の展覧会パンフレットに文章を寄せた、友人でもあるコラムニストの小田嶋隆は、すでに彼の本質を見抜いてこう書いている。

「中込氏のアートには、…ひとっかけらも説明的なところがなかった。説明どころか、逆に、見る者に答えを要求してた。…表現者は、答えを提示するよりも、むしろ、問いを発しなくてはいけない」

　さて、最初の問いの答えはもうお分かりだと思う。1065という番号を付された「Landscape」が描いているのは、絵を観ている〝あなた〟の原風景なのだ。

（原稿はインタビューによる構成です・敬称略）

Person 05
Tokuo Kanemaru

Profile
1980年東京大学法学部卒業、同年株式会社講談社入社。1997年TOKYO1週間編集長。2002年人事部長。03年主計部長。05年経理局長。07年取締役就任、現在に至る。

株主総会後の記者発表の席で

金丸徳雄

（昭和51年卒）
株式会社講談社取締役

自分が何に向いているのかは簡単には分からない

男 性誌でグラビアやインタビューの仕事がやりたくて、就職活動では出版社を中心に受験しました。「小学生の時から『週刊少年マガジン』を読んでました」のひと言が効いたのか、講談社に就職することができました。

最初に配属されたのはその週刊少年マガジン編集部。しかも、グラビア担当ですから4分の3くらい希望通り（笑）です。

その後は、『PENTHOUSE』、『週刊現代』と、基本的には男性誌のグラビア・記事を中心に仕事をしました。自分の年齢が上がるのと一緒に雑誌の読者の年齢も上がったので、自分が読みたい記事を作ることができました。ほぼ希望通りの編集者人生ですね。

ところが、次の部署は人事部。編集者としてもう終わりなのかと悩みましたが、楽観的な性格でなんとかなるさと過ごしました。

驚いたのは、大学で学んだ法学の知識が、人事部で実際にかなり役に立ったこと。中でも、労働法や民法が実地にどう機能しているかを知ってからは、法学について理解が深まったと思います。この観点からは、アメリカみたいに、一度社会に出てから大学に行く方が理にかなっているのでしょうね。

それでも、どうしても編集に戻りたくて、当時はやり始めていたマルチメディア、とくにCD-ROMの研究をお題目に会社の留学制度に応募して、先駆者であるNYのボイジャー社に留学（留社？）しました。

戻ってきてから、情報誌『TOKYO1週間』の創刊に携わることになり、編集に復帰できました。昔から、食べることや、ガジェットが好きだったので、仕事は楽しかった。週刊誌の編集長にまでしてもらいましたが、1年半で交代。編集者として大成功したとは言えないでしょうね。

足りなかったもの

同 期入社に、メガヒット作『五体不満足』の担当と『海賊と呼ばれた男』の担当がいますが、大成果を上げた彼らに共通するのは、男性で、最初の仕事が女性誌だったことです。他にも成功した編集者には、女性誌出身の男性が多い。

自分の好きなものではなく、読者がどういうものを欲しがっているかをリサーチして記事を作る。読者との距離感を常に測りながら企画を考えるから、対象が子供になったり老人になったりしても対応できる。それが秘訣なのだと、今になると分かります。自分にはそれが足りなかった。

編集の後は、人事部長、経理で決算等を担当する主計部長、その延長で経理局長、経理担当役員と管理部門が長くなりました。現在は、雑誌・書籍の製作管理、流通、システムも担当しています。最初にマガジンに入った時には想像もつかない人生です。

講談社は総合出版社なので、部門横断的な人事がけっこうあります。中でも象徴的なのは、ジャーナリズム誌からマンガ誌への異動に成功例が多いこと。最近のマンガ、例えば医療ものなどには、豊富な裏付け情報が必須なので、取材力が必要なんです。

「できること」を見極める

私 がこれまで会社の人事や採用に関わってきて気付いたのは、「自分が好きなことと、上手にできることは違う」という単純な事実です。

出版においては、〝本を読む〟というだれでもが経験していることと、〝本をつくる〟という実は難しい仕事が同じもののように見えるせいか、「絵本が好きだから絵本を作りたい」という人がたくさんいます。私もそのひとりかもしれませんね（笑）。でも、例えば「写真が好き」ということと「いい写真が撮れる」というのは全く違う話ですよね。

私の場合も、出版社という文系だらけの会社の中で高校2年生まで理系だったことがキャリアにプラスになっていると感じます。人生は難しいですね。

高校生の時にどうすればベストなのか正直分かりませんが、「自分が本当に得意なこと＝できること」は何なのかを、よく見極めることが大事なのかもしれません。

こんなことをしてた時代もありました（仕事です！）

Person
06
Yae Dobashi

夢を現実にした雑誌
「J-goods」

土橋八恵

(昭和58年卒業)
出版社経営

ロスのフリーウエイを、校歌を歌いながら運転しています

日本とは違うチャンスが、たくさんある街

2 002年、ロサンゼルスで起業。中国語で日本の文化や商品を紹介する雑誌を創刊。国際社会で、日本がなんとなく元気がなくなった頃、一方の中国は世界の工場から市場へと変化し始めた。そんなアメリカ在住の中華系に日本を紹介し、購買を促すことで、海外から日本を応援できるのでは？　そんな志で始めた雑誌。

仕事を通して日本人の感覚が、良い悪いに関わらず、グローバルスタンダードからズレていると感じることがある。「日本人は決断が遅い」と中国人から笑われ、「様子を見るって、何の様子を見ているのだ？」と問い詰められ。一方こちらは、中国人の大風呂敷に閉口させられたり、豪快さに救われたり。それぞれの違いやズレを、個性の一部として受け入れながら、お互いが主張する。そんなやりとりこそが、海外で仕事をする醍醐味だ。特に口サンゼルスは、移民の街。ここにいながら世界中の人たちと接するチャンスがある。アウェイがアウェイの人たちを相手に商売が出来るのも、この地の魅力だ。

広大な口サンゼルス郡、点在する市を移動するだけでも、片道50キロ以上にもなる。車で移動の際に、気付くと一高の校歌を口ずさんでいることがある。嬉しい時、何かを決断しなければならない時、悪いことがあった時。〝新しき 世の鑑とし〟〝日に新た また日に新た 弥高き のぞみをもちて 真なる理究め〟己の受けた教育を振り返り、己の今を振り返る。「よし、このまま行こう」、「いや、これは真ではない」、判断基準にしている自分がいる。

山梨にとっての、新しき世の鑑(かがみ)でありたい。日本を離れて20数年、最近その思いが強くなってきた。自分にだから出来ること、自分がしてきたことを山梨の役に立てたい、それは日本のためにもなるはず。海外生活が長い人の多くは、日本や故郷を思い、その役に立ちたいと口にする。

一高生で良かった

国 際舞台で活躍できる青少年の育成を支援したいと、2010年から山梨県、小佐野財団と一緒に始めた、山梨の高校生による「口サンゼルスで山梨をPRする企画コンテスト」。2013年は、一高生が最優秀に選ばれ、当地で自ら企画を実践した。この事業を立ち上げたときの「いつか一高生に来て欲しい」との願いが、開始4年目で実現した。来米した後輩達が将来の夢を語る姿に、あの懐かしい校舎や校庭、部室を思い出し、その当時の自分が重なった。あのときの夢に向かって、自分は進んでいるのだろうか？　答えは「Yes！I'm sure」。

一高生よ、今受けている教育に誇りを持ち、国際舞台を目指せ！

新鐙

Profile
1991年渡米。ロサンゼルスの日本語ラジオ局のアナウンサーを経て、2002年起業。「異文化の架け橋になる」を社是に、中国語雑誌J-goodsを創刊。今後は山梨とアメリカの架け橋になれるよう、画策中。

Person 07
Toshio Watanabe

渡辺利夫

（昭和33年卒）
拓殖大学第十八代総長

けっこう、タフに生きてきたような気がします

Profile

慶應義塾大学大学院博士課程修了。経済学博士。東京工業大学名誉教授。第17期日本学術会議会員。アジア政経学会元理事長。外務省国際協力に関する有識者会議議長。日本安全保障・危機管理学会会長。

「どうにかここまでやって来ました」

昭和33年の卒業生です。今年75歳になります。甲府一高時代は自分が大学にいけるなどとは、とんと考えておりませんでした。しかし商売が軌道に乗り、金銭に多少のゆとりが生まれ、家族のうち一人くらいは名のある大学に進学させようと父は考えたらしく、荷の重いことでしたが、その役割が私に回ってきました。

勉強らしい勉強はまるでやってこなかった私は、一年間の浪人生活を甲府の自宅にこもって続け、翌年に慶応義塾大学経済学部に入学できたのですが、これが左翼全盛時代。「60年安保」の世情騒然の時期、ここでも口に勉強もせずに、どうにか卒業だけはさせてもらって、日本化薬株式会社に入社できました。東京の赤羽と広島の福山での工場勤務は実に貴重なものでした。多様な人間と付き合い、QC運動を通じて企業というものの存在を肌で覚えることもできました。

父母のことを思って大学院入りを決意

しかし、大学時代に自分は何も勉強してこなかったではないか。世の中は激しく動いているではないか。この現実を動かしているものを学問の眼で理解する機会は、この年齢を外しては再び手にできないのではないか。そういう思いに駆られ、苦しい家計をやり繰りしてここまで育ててくれた父母のことを思うと、なかなか踏ん切りがつかなかったのですが、思い切って母校の大学院に入ることを決意しました。

アジアの国々の開発のための政策的処方箋を描く開発経済学を研究

博士前期課程と後期課程の5年間は、うどんとカレーライス以外のものを食った記憶がないほどの極貧の生活でしたが、自分のことながらうらやましいほどのエネルギーを研究に注ぎ込むことができました。

研究対象は開発経済学という、当時勃興しつつあったアジアの国々の開発のための政策的処方箋を描くという、実践的な経済学の一分野でした。

この研究により母校から博士号を取得。以降、草創期の筑波大学、その後、東京工業大学の教授を勤めて定年を迎えました。60歳でした。

その頃、拓殖大学では創学百年を迎えるに当たり、拓殖大学「拓殖学部」ともいうべき「国際開発学部」を創設したいので汗をかかないか、というお誘いを受け、その初代学部長、次いで大学院長、学長、現在は総長職にあります。これまでの人生で拓大が一番長い仕事になりました。

若き青年諸兄！タフに生きてほしい

韓国に始まり東南アジア、そして中国と、開発経済学の政策理論の構築を求めて、各地を這うように繁く動いてきました。タフな躰と精神のDNAを与えてくれた父母と祖先に感謝しています。

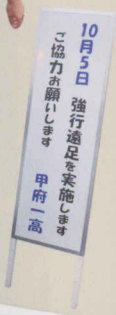
山梨県のシンクタンクである山梨総合研究所の理事長をこの10数年勤めています。この研究所のOBの50数名が、県市町村の中堅幹部として活躍しています。

現在の日本は、私どもの青春時代とは比較にならないほど豊かで、価値観も多様化しています。しかしこのことは、自分がよほど強い信念を持たねば、自分らしい人生をまっとうできないことをも意味しています。

甲府一高の若き青年諸兄！　タフに生きてほしい。

特集2

伝統の「強行遠足」が、11年ぶりに甲府GO!小諸 間105キロ復活!!



2013年10月5日(土)6日(日)、第87回強行遠足が実施された。
11年前の痛ましい交通事故で女生徒が死亡、大幅な実施変更が余儀なくされた。
しかし、大きな応援や支持の声に後押しされ、
伝統の強行遠足は正規の距離である105キロが復活したのである。
その立役者の一人、中澤達彦先生(体育振興係)のインタビューなどを通して
現状のレポートと未来への提言をしたい。(文・遠藤励起)

未来につなげたい一高生の夢

甲府一高の強行遠足、OBの皆さんにとってそれぞれの思い出があるだろう。ただただ辛かった、寒かった、痛かった、眠かった、という肉体的な感想もあれば、野辺山のしじみ汁は、冷えた体にこてえさらんかった（ありがたかった）、臼田のおばちゃんの牛乳とリンゴがうまかった、という声もあるに違いない。

さまざまな体験をして、それぞれの強行遠足がある。もちろん、小諸までの105キロを歩き切るという感動が唯一無二のものであることは間違いない。

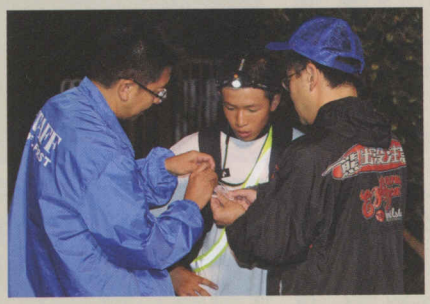
さて、今回の取材・執筆をするにあたり、多くの関係者の方々にご協力をいただいた。私自身一高に来たのは、卒業以来ということもあり、意識は高校生のままだった。

もちろん、校舎が新しく建て替えられていることは、知っている。講堂をはじめ、懐かしい建物が取り壊されたことも分かっている。写真も見ている。そして、40年ぶりに見る母校は、面影の残る別の学校であった。

まずは、先生方から強行遠足の説明を受け、資料をいただいて、「へえ～、今はこんなこんになってるだね！」という印象である。懐しさと、新鮮さが混在する。それでは、早速第87回強行遠足のレポートを始めてみよう。

甲府一高新聞でトップ記事

現在の甲府一高新聞は、新聞部が月刊で発行するタブロイド判（両面）4色新聞。校内の問題、さまざまなイベント、教師紹介、社会問題への提言、4コマ漫画など、バラエティに富む内容になっている。その9月号の裏面トップ



が、開催を来月に控えた「強行遠足」の取材記事である。1週間前の生徒たちの思いが紹介されている。

○仲間6人でチームベクトルを結成。6人全員で最終地点の小諸まで絶対行きたい。メンバーは、体育のない日には夜30~40分走っている。(3年)

○105キロという距離はとても長く、走りきるのは難しいと思うが、根性で頑張って、ぜひ完走したいと思う。(2年)

○正直105キロという距離を聞くだけで嫌だけど、決まってしまったことなので、腹をくくって精一杯頑張りたいと思う。(2年)

○楽しめたらいいと思うが、後半絶対に辛くなると思う。しかし、人生の壁だと思って、何とかして乗り越えていきたい。(1年)

などというコメントが紙面をにぎわしている。純粋な高校生の強行遠足にかける思いがひしひしと伝わってくる。青春である。

そして、10月号、トップはもちろん、強行遠足である!(16ページ参照)「第87回強行遠足　小諸復活!　男子、半数近く小諸へ」という見出し。新聞から、ダイジェストでお伝えしたい。

――男子は11年ぶりに距離が元に戻され、学校から小諸までの105・7キロ。午後2時にスタートし、翌日の午後2時に終了の24時間制限。

今年の強行遠足は天候が心配されたが、雨が降ることもない良い環境で行われた。

今年は男子の歩行距離が30キロ延長され、小諸到着率は30％前後と予想されていたが、それに反して、実際の小諸到着率は47・85％と半数近い生徒が最終地点に到着した。

学年ごとに見てみると、1年生は初めてということもあり29・57％、2年生は3学年で一番高く66・42％。その理由は、「来年は厳しいので、今回本気で頑張ろう」「前回の失敗を生かして、今年は最後まで行きたい」と考えた人が多かったようだ。3年生は44・17％と予想より高かった。最初で最後の105キロであり、一生で最後の強行遠足ということで、完走を目指す人が多かったのではないだろうか。

トップの生徒（3年）は「初めての105キロの強行遠足。とても良い経験になった。一番大変だったところは小海から先で、そこからは自分にとって未知の世界だった」。同時ゴールの生徒（2年）は「距離が変更された年に完走できたことはとてもうれしい。道中は、さまざまな場所で人の温かさを感じることができた」と喜びを語っていた。

強行遠足は11年前の悲痛な事故を受け、コースを短縮して行われていた。しかし、「いずれの日にか小諸へ」という当時の生徒・職員の思いと、ご遺族や同窓会などの強い要望を受けて、小諸までの道のりが復活した。1年生と2年生は来年も挑戦する。このような出来事があったことを忘れず、甲府一高の伝統である強行遠足を引き継いでほしい。

新鐙

甲府一高新聞

第231号　甲府一高新聞　平成25年10月31日

第87回強行遠足　小諸復活！

男子、半数近く小諸へ

自然にふれながら自己の限界に挑む

10月号

発行所
甲府一高新聞部

強行遠足出発点

【号砲の合図で学校を出発する男子】

100人アンケート

「あなたはお守りを渡しましたか？」

北見北斗高校4人が参加
一高生と交流を深める

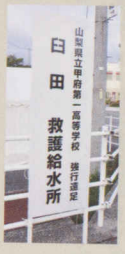
【一高生と肩を組んでゴールする大西君】

我らが精鋭

自分の意思を持って、行動して欲しい

【理科・物理 並木由貴子先生】

擬宝珠



山梨県立甲府第一高等学校　強行遠足

臼田救護給水所

甲府第一高等学校　強行遠足

最終到達地点

小海救護検印所

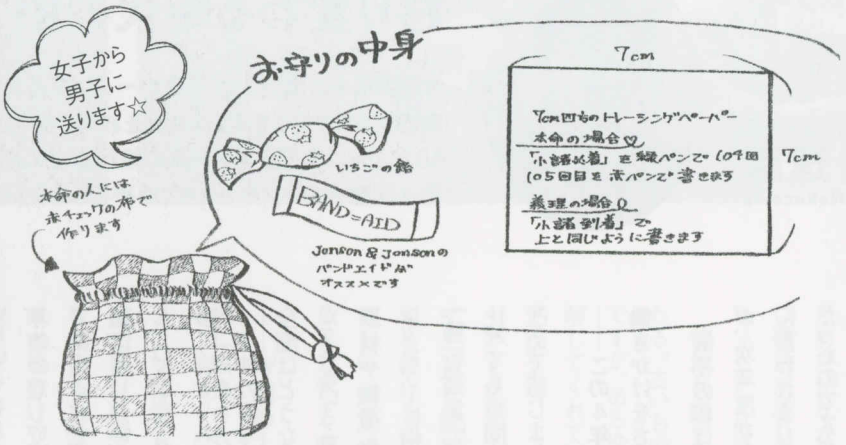
100人アンケート「あなたはお守り渡しましたか?」

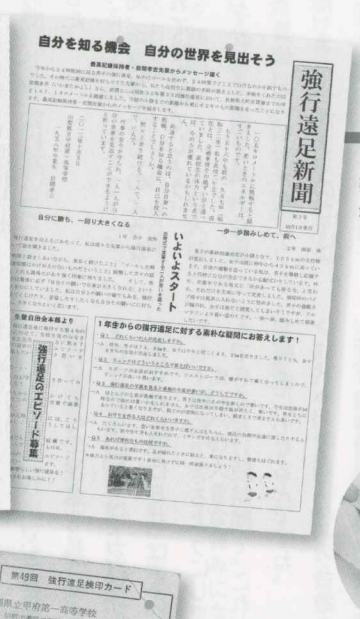
「強行遠足」と言えばお守り。テーマは「あなたはお守りを渡しましたか?」。1年から3年の女子100人にアンケート。

お守りを作った女子は91%(91人)という驚きの結果となった。さらに5個以上作った人が約半数。渡した相手は友達や部活の仲間が多く、その他の項目では、「(友達ではない)クラスの男子」など。

また、お守りは作らなかったが、ラッピング袋にお菓子を入れてみんなに渡したなどの意見も多かった。

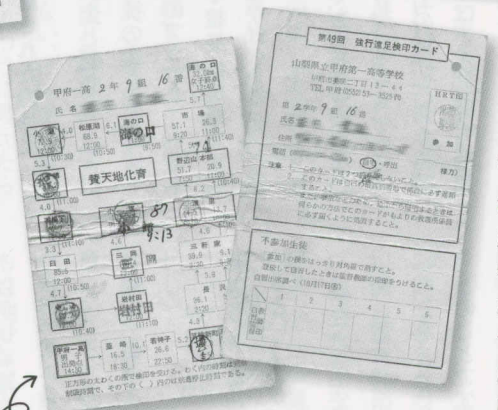
今年は小諸復活の年ということもあり、お守りを作った人が多かったようだ。お守りは、強行遠足に欠くことのできないアイテムになるのかもしれない。





強行遠足新聞で盛り上がるゴール小諸への思い

読み取り機にかざすだけ!



ボロボロになった検印カードには、汗と涙と喜びがしみ込んでいる!

強行遠足新聞

生徒会が発行するタブロイド判(両面)4色新聞。今回は、4回発行された。強行遠足に参加する一高生のために、校長先生、担当の先生、上級生などのメッセージをはじめ、「秘伝・完走のために」(上級生の声)、「一高伝統のお守りの作り方」(おすすめ手芸店紹介もある)、「必需品チェック~あれ持った?~」(「復讐心」なんていうものも)、「臼田リンゴ伝説~簡単アップルパイの作り方」(臼田のリンゴを女子にあげ、アップルパイを作って食べ、カップルが永遠の愛を誓うという伝説)、「強行遠足あるある」(一緒に行こう!はことごとく裏切られる。あと2キロの看板を絶対に信じない、等)。

身分証明書が検印カード

我々の時代(昭和50年頃)は、「強行遠足検印カード」というものがあり(写真左参照)、各救護所に着くとハンコが押された。カードをひもで通し、首にぶら下げ、一つひとつハンコが押されるのが前に進む原動力になった。

しかし、最近は違うのである。入学と同時に作られる顔写真入りの「身分証明書」(写真下)にはバーコードが入っていて、救護所に設置してある読み取り機にかざすと通過が記録されるというものだ。うーむ、IT化は強行遠足まで変えてしまっていたのだ。

長く続けるために、これから100年をどうするかという発想

体育振興係
中澤 達彦
Tatsuhiko Nakazawa

移り変わる時代の中で必要なこと

今回105キロ復活の立役者の一人、中澤先生に実現するまでのさまざまなお話をお伺いした。40年ぶりに見聞きする一高の強行遠足の現実を考えることは、我々同窓会のメンバーたちの「夢をつなぐ」仕事のようにも思える。

――11年ぶりに、伝統の「強行遠足」が〝正規の距離〟である105キロ、小諸までのコースで復活しました！

4年前に甲府一高に着任した当時から「やりたい」「やろう」という声は多く、伝統の105キロを復活させるという話はいろいろなところから言われました。11年前の悲しい出来事以来、距離を短縮して実施されてきたものの、やはり元の距離に戻したいという声は、校内はもちろん、OBの方々や、まわりの人たちから数多く寄せられていました。

ですからなおのこと、その一方で、「安全面はどうなのか？ まだ早いのではないか？」という意見もたくさんありました。取材や報道もすごかったし、学校へのプレッシャーは相当強いものでした。一高の「強行遠足」は他校のいろいろな行事に比べても世間の関心が非常に高いことを改めて感じました。

――この4年間、中澤先生はどのような働きかけをされてきたのでしょう。

最初の年は、それこそ〝様子見〟でしたが、次年度から、具体的に検討するように言われました。まだ小海までのコースだったのですが、その時に小諸までのコースも見てみて、「これなら行けるかな」と。その時に自分の中では、漠然としてではあるが、何となくイメージができました。そこから2年かけて、職員の意思統一とか、マスコミへの対応だとか、細かいことを詰めていきました。

ただ、周囲の雰囲気で「やる」が一人歩きしてしまっていて、一番大切な「安全と健康」という部分があいまいなままだったので、この最重要課題を本当にしっかり確保することを条件に校長（前校長・奥田正直氏）に決断を仰ぎました。大変な決断だったと思います。どんなことよりも一番大変だったのは、この「やるんだ！」という決断だったと思います。

――その際、一番考慮されたのは？

やはり何よりも「安全と健康」ではないでしょうか。いかに生徒の安全と健康を確保するか。そのためのプランをこれでもかというくらい考えて校長に提示しました。そうしたら「命をかけて、やる」と決断してくれたんです。

もちろん、これまでも生徒の安全については細心の注意を払ってきました。例えば今回は、30台以上の貸切バスを路線バス並みに運行させ、ほとんど待ち時間なしで帰校できるようにしました。それもできるだけ短時間で。これが生徒の負担軽減にもなるんですね。

コストを考えてバスの台数を減らすと、生徒は何時間も待機していなければならない。その間に体調を崩してしまう場合があります。すぐバスに乗って帰れるということなら、気持ちの面でも違うのではないでしょうか。

――なるほど。我々の頃から思うと、やはり時代は変わったなと。

「強行遠足」は、90年もの歴史の中で、3回中止がありましたが、連綿と続いてきた甲府一高の伝統行事です。

これは、夜を徹して105キロという道をひたすら歩くという、そこにいろいろな〝困難〟があったから続いてきたんだと思います。いいかげんな気持ちでは決して続きません。

しかし、こうした時代の変化の中では、やはり「昔はこうだったから、我々はああだったから」という感情論や考え方はもう変えていかなくてはいけないでしょう。

――かつては、105キロ走った翌日も、朝きちんと登校して、自分の席に座っているというのがゴールでした。

現在では次の日は休みです。さらに、以前は電車の中でみんな、グッタリして床に転がるようになりながら帰ってきていたとのことですが、当時はそれも、「ああ、甲府一高の強行遠足か」と、まわりの人たちも許してくれたかもしれません。でも、今そんなことをしたら苦情が多く寄せられてしまうのではないでしょうか。

また、OBの方々からはよく、「我々の頃は、何も見えない、真っ暗闇の中を必死で歩いた。それが強行遠足なのに」という意見も聞かれます。お気持ちは分かりますが、今はそういう時代ではありません。

周囲から理解していただくほうが難しいと思います。

私と校長は、一高のOBではないので、そうしたいろんな意味でのしがらみやこだわりがなかったから、今回の105キロ復活が成し遂げられたのではないかと、ちょっとした自負を感じています(笑)。

10年も経てば人も変わるし、時代も変わる。古いものを踏襲していくのは大切ですが、あらゆるものが変わり、むしろ理解してくれている人のほうが少なくなっています。

ですから、これからが大切だと思います。「長く続けるには、これからの100年を続けるにはどうしたらいいか」ということに、現実的にどう対応するかということを考えていきたいと思っています。

——今回の105キロ復活にあたって、特に改良された点はありますか?

より安全を確保するために今回は、貸切バスの台数を大幅に増やしたことです。もちろん大型バスを丸2日、何十台も拘束するわけですから、「そんなにバスの台数がいるのか」という声もありました。でも、バスを用意するメリットは、「移動救護所」になるということ。屋根もついていますから、天気が悪くなっても生徒を全部収容できます。もちろんスタッフも。避難所としても使えます。

そのかわり、やっぱりムダは出ます。でもそれは安全への投資なので、ご理解いただければと思います。でもこれが、今回の成功の大きな力の一つになったことは間違いありません。それと、関係機関と協力者の方々の献身的なご協力です。特に同窓会の皆様には、医師の確保など多くの方々にご協力をいただき感謝しております。

——次回への大きな弾みになりますね。

私の中では、これが「第1回」だと思っています。成功はしたけれど、改善点や問題点も、もちろんたくさんあります。ただし、改善したほうがいいのか、そのままのほうがいいのかというのは、まだ分かりません。今回は、絶対に事故のないよう、成功させるために、前年までの小海までのコースは変えずに、小諸までのコースを復活させただけですから、今後、変更も含め検証していかなければと思っています。

また男子は街灯のない、ほぼ真っ暗闇の中を行くわけです。ふつうに考えたら一番危険なことでしょう。街灯を設置しろといった声もありますが、そう簡単にはいきません。何といっても最近は、当の生徒よりも、拠点に座っているスタッフの方から「心細い」という連絡のほうが多いくらいですから。お手伝いをしてくださっている人も生徒と同じ安全基準でやってほしいという意見もたくさん聞きました。

こういうイベントがどんどん少なくなる中で、関係機関の許可等が、年々厳しくなりそうな気配もあり、そのあたりが気がかりです。

——特に今後、改善していかなければいけないことは?

教職員の側から言えば、勤務時間という問題があります。

現状はほとんど不眠不休の勤務になります。仕事だと思ってやっていたら、とてもじゃないけどできないでしょう。やはりどうしても、職員の間で温度差というものはあると思いますが。

例えば、誰かに配慮して負担を減らせば、他の誰かにそのしわ寄せが行く。職員によって仕事量が変わってきてしまうという問題もありますね。

それに、折悪しくその季節はけっこう忙しいんです。入試が早まって、推薦入試の時期に重なるんですね。特に三学年職員にとっては非常にキツいと思います。だからといって、負担の軽い仕事を、といっても性別や年齢など、それぞれの役割には適性もあって、とても難しいのです。そこに配慮しすぎると、またどこかにしわ寄せが行く。それをなんとか解消しようと検討をしているところです。

それでも、同窓生ではない先生がこの学校に来て、自分たちが実際に強行遠足を体験すると、みんなこの行事のファンになるんです。大変にキツい勤務で、最初はみんな不満タラタラだけど、経験を重ねていくと、逆にファンになっていく。先生も変わっていくんです。

――中澤先生は着任されて4年間、強行遠足に携わってこられたわけですが、どんな印象を持たれましたか？

甲府一高の強行遠足が注目を浴びるのはとてもうれしいことですが、報道などで誤解されてしまい、それがそのまま生徒たちにも伝わってしまっているという現状があります。むしろ報道が過剰だったりして、強行遠足の目的をはきちがえて、むやみやたらと美化されて報道されています。

その結果、本来の目的とは違うかたちで伝わってしまうことが多いので、そのことは今後も心配しています。

まず大事なことは、「強行遠足は、競争じゃない」ということです。「自分の体力に応じて、歩けるだけ歩く」「一切の妥協と怠慢を排除して、精魂限り歩く」。これは自分の体力と精神への挑戦ということです。それなのに、「絶対に小諸まで行かなければ！」という風潮になってしまっています。順位もそう。だから当然無理をする。だからどれだけ安全を考えて、いろいろな手を尽くしても、事故の可能性が大きくなってしまいます。

生徒たちには、本音では1位だったとか、2位だったとか、タイムや距離はどうだったなどと思ったとしても、強行遠足は、教育的行事としてそういう目的はない、だからそういう話をすることはないと伝えています。

極端に言えば、校門を一歩出て中止してもいいのです。それを批判したり、責めたりすることなんてないですし。ただ、1年の時から言い続けた3年生のコメントには、やっぱりこちらの真意が伝わっていないものもいくつかあって、それは残念に思いますね。

一高の生徒はみんなまじめだから、「やらなきゃ！」という気持ちが強すぎるので、私の一番の苦労といえば、それでしょうね。大げさではなく、命をすり減らす思いです。事故のないよう、毎回自分の命をかける、みたいな。本当にこんなに神経を使う行事はないです。

ですから、生徒たちには、そういう意識、大人の考えを持ってほしいですね。のどが渇いたら、コンビニや自販機を利用する、トイレに行きたくなったら公共施設を探す。赤信号なら止まるし、青になったら進む。信号がなければ左右よく見て渡るとか。そんなのこちらで用意しなくても当たり前のことですよね。ところがそれができていない。

全校集会でも話すのですが、そういう当たり前のことができているからこそ強行遠足がやれるんだと。例えば、学校の向かいにあるバス停で下車した生徒がそのまま道路を横断してしまうのです。すぐ先に横断歩道も歩道橋もあるのに、めんどうだからと道路を横切ってしまう。「そういうのを見てしまうと、強行遠足はできないと思う」と。

それが、ある時から横断歩道、歩道橋を使うようになったんです。それで、「これなら、いけるな」って思ったんです。

――保護者の意識改革も必要では？

そこでちょっと苦言を呈したいのが、保護者がギャラリーになってしまうことです。自分の子どもを応援しようと車で伴走したりするんです。それで車が増えるし、交通ルールを守らずにノロノロ運転したり、ずっと路肩に停車したりと、無理な運転もする。生徒たちよりも、むしろそちらのほうが問題だと思います。

一生懸命お手伝いしてくれている保護者からしたら、「何なのあれ？」「そんなことやってるんなら手伝ってよ！」というふうになってしまっているんです。そこが一番の問題ですね。だから、まわりの大人たちも、みんな常識・マナーを守れないと、強行遠足は絶対できないと。

――それだけ注目されているイベントを、いろいろなご苦労の末に実現された。

ふつうなら生徒だって、あれだけのマスコミやギャラリーに囲まれて、ちょっとくらい調子に乗ってしまうでしょう。でも、誰一人そんな生徒はいませんでした。本当に普通にやっていました。今回の成功の、最大の要因はそんな「生徒たちの意識」です。これが何よりもうれしかったことでしょうか。

新鐘

『歩け、心のかぎり 1924-1996』から　昭和の強行遠足

平成25年度 甲府一高この1年

4月 April

入学式

8日、入学式が行われました。今年度は、普通科241名、英語科36名、計277名の新入生を迎え、本校体育館で行われました。

応援練習

16日、17日、一年生を対象に応援団の指導のもと応援練習が体育館で行われました。

5月 May

第65回山梨県高校総合体育大会

8日、総合開会式が小瀬スポーツ公園陸上競技場で行われました。競技は10日まで行われ、本校からは17競技に出場しました。一高の総合順位は男子13位（13点）、女子6位（14点）でした。山岳部女子とテニス部男子個人で全国大会へ、陸上部、テニス部男女、アーチェリー部男女、弓道部女子、空手部男女、山岳部男子の6競技が関東大会への切符をつかみました。

キティちゃんが強行遠足の名場面を再現

昨年、好評の一高キティちゃんが今年は強行遠足バージョンになりました。小諸復活を記念して作られたストラップは、キティとダニエルが一緒にリンゴを持っています。同窓会総会で販売され、本校購買でも発売され人気を集めました

6月 June

関東高校体育大会

陸上部、テニス部男女、アーチェリー部男女、弓道部女子、空手部男女が出場。アーチェリー部男子が団体3位、弓道部女子は射る時の美しさを評価基準とする技能優秀で4位に入賞しました。

一高祭

21日、22日、一高祭が行われました。1日目はコラニー文化ホールで、開祭式のあとクラス発表、文化部発表がありました。2日目は、学校で一般公開がありました。たくさんの方が来校されて、クラス展示、クラス新聞や似顔絵、部展示などを見ていただきました。

応援団演舞発表会「団旗の下に」開催

30日、応援団による演舞発表会「団旗の下に」が体育館で行われました。この発表会は7年ぶりに行われ、生徒、保護者、卒業生ら約250名が来場し、応援団の力強い演舞に拍手を送っていました。

7月 July

第95回全国高校野球選手権山梨大会

全国高校野球選手権山梨大会で、本校野球部は7月15日に2回戦から登場し、日大明誠高校に4対8で敗退しました。

この夏、多くの部活動が全国大会に出場

NHK杯全国高校放送コンテスト（東京都）に放送部が出場。大分を中心とした北部九州で開催された全国高校総体（インターハイ）に山岳部女子、テニス部男子、弓道部女子が出場。全国高校総合文化祭（長崎県）に美術部、箏曲部、新聞部、囲碁将棋部が出場。他県の高校生たちとスポーツや芸術を通して交流しました。

学校説明会

20日、普通科・英語科の説明会がコラニー文化ホールで行われました。今年も生徒主体の運営がとても好評でした。

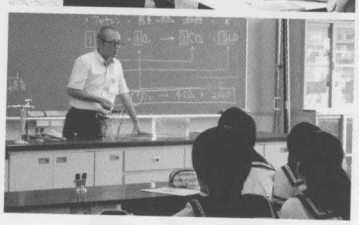
8月 August

日新基金プロジェクト

創立130周年を記念して創立された生徒の自主的活動を支援する日新基金で、今年はア・カペラ部員が企画した「夢の架け橋～ロサンゼルスコンサート～」というプロジェクトが採用されました。6日から12日にかけてアメリカのロサンゼルス市で歌を通して国際交流をしました。

オープンスクール

24日、オープンスクールが行われました。午前と午後の2回に分けて、体験授業・施設見学・部活動見学等が行われ、中学生、保護者が約1000人参加しました。



9月 September

西関東吹奏楽コンクール

7日、新潟県新潟市で行われた西関東吹奏楽コンクールに応援団吹奏楽部が高校Aの部に出場し、銅賞を受賞しました。

10月 October

第87回強行遠足、小諸復活

5日、6日、本校最大の行事である強行遠足が行われました。今年は男子の距離が学校から小諸までの105.7kmに延長されました。女子は高根から小海までの43.2km。男女とも己の力の限界に挑みました。11年ぶりの「小諸復活」ということで、多くの同窓生の方にご協力をいただきました。また、強行遠足で交流している北海道の北見北斗高校から男女4名の生徒が参加し、一高生と一緒にゴールしました。

やまなし国文祭、ローソンコラボ商品「桃ンパン」発売

一高生が考案した桃風味のメロンパン「桃ンパン」が期間限定で関東甲信越のローソンで発売され、大好評でした。

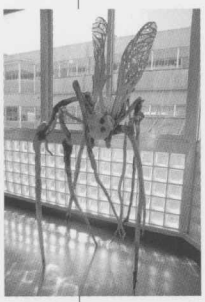
甲府第一美術館

秋の特別展が「REMEMBER FUKUSHIMA(リメンバー フクシマ)」というスローガンで21日から27日まで行われ、福島に関する写真展や福島の酪農家の方の講演会が行われました。

新人大会

2年生中心となった新チームの公式戦では、アーチェリー部が全国大会、テニス部男女が関東大会への出場が決まりました。他の多くの部も健闘しました。

11月 November



第34回山梨県高校芸術文化祭

7日、山梨県高校芸術文化祭のグランドステージが行われました。文化祭には15部、約180名が参加し、芸術文化祭賞(吹奏楽部、美術部、ア・カペラ部)、最優秀賞(新聞部)、優秀賞(美術部・放送部)等多くの賞を受け、文化活動の成果を披露しました。

韓国忠清北道スポーツ交流

アーチェリー部が県内他2校のアーチェリー部員と共に、25日から29日まで、韓国忠清北道を訪問し、アーチェリーを通して韓国の選手と交流を行いました。

12月 December

研修旅行

10日から13日まで、2年生が沖縄研修旅行に行きました。沖縄の美しい自然に触れ、平和学習で講話を聞いたり、戦跡を巡ったりしました。

第7回関東高校スピーチコンテストに出場

8日、関東甲信越地区高校英語スピーチコンテストが本校を会場に行われ、山梨県代表として本校英語科の生徒が出場し、スピーチを披露しました。

2月 February

同窓会入会式

28日、3年生269名が同窓会に入会しました。

3月 March

卒業式

1日、普通科232名、英語科37名、計269名の卒業生が母校を巣立っていきました。

短期海外研修

生徒20名と教員2名がオーストラリアの姉妹校ヘンリー高校に3月13日から22日まで、短期海外研修に行ってきました。

全国高校選抜大会

アーチェリー部男女とテニス部男子が出場しました。テニス部男子主将は開会式で選手宣誓の大役を務めました。

Yuriko Taniguchi
一紅会会長
谷口百合子
（昭和三十六年卒）

夢をつないで十七年

東京同窓会の女性のネットワークとして発足した「一紅会」は今年で十七年目を迎えました。活動の中心になっているのは幹事会で、当初幹事は三十名位でしたのが、今や七十名余りの大所帯となりました。会員相互の交流を図りながらも活発な話し合いの中、更なる一紅会の発展のために模索しながら幹事一同努力致しております。

同窓会の活性化のため開始された講演会は、今では多くの同窓生に親しまれるようになりました。十七回目を迎えた今年は、三月に小河原正己氏（三十四年卒）をお迎えし、「万葉集は古代人のドキュメンタリー」と題して講演していただきました。三八〇名という多くの方のご参加をいただき、盛況裏に終わりましたのも、ひとえに皆様方の温かいご支援の賜物と、心より感謝いたしております。

講演会から派生した「歴史研究同好会」（井上若子幹事担当）は、渡辺房男先生（三十八年卒）をリーダーに年二回の活動を行っております。

東京同窓会が女性の参加により活発に運営されるようにという初期の目的は年を重ねる毎に達成されたのではないかと思っております。若い力を得てさらに同窓文化発展のために、また出来得る社会貢献のために新たなる一紅会の夢をつないでいきたいと思っています。

新緑

一紅会

「万葉集」は、古代人のドキュメンタリー
～いま「万葉集」が面白い～

Masami Ogahara
プロデューサー
小河原正己（昭和34年卒）

2014年3月8日／アルカディア市ケ谷

本日「万葉集」をテーマにお話をさせてもらうことに一番驚いているのが、他でもありません、この私本人です。中学・高校以来国語とりわけ古文は大の苦手、というより大嫌いな科目でした。NHKでテレビの仕事をするようになってからも、番組作りはドキュメンタリー志向で、「万葉集」などについては無知蒙昧、縁もゆかりもありませんでした。↖

TALK SHOW OF MASAMI OGAHARA

ところが、定年退職後の頼まれ仕事としてやむなく引き受けたのが「日めくり万葉集」……。そんな私に思いがけないことが起こります。ある日突然「万葉集」の魅力にとり憑かれ、以来すっかりはまってしまったのです。全くの門外漢のプロデューサーを、自称「万葉集の宣伝係」に変えさせた、万葉集の魅力とは？——

富士山は噴煙を上げ、富士五湖は三湖だった

昨年世界文化遺産に登録され注目を集めた富士山。万葉集の富士山を詠んだ歌一一首の中で、最もよく知られ愛唱されている歌の一つ、山部宿禰赤人の不尽山を望める歌（巻三・三一八）。

田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ
富士の高嶺に雪は降りける

歌の作者山部赤人が望み見た富士の山は、今私たちが見ている富士山とは違っていました。万葉の時代、富士山は、「不尽山」と表記され「神代の昔から活動を続ける永遠に命の尽きない山」でした。つまり、当時富士山は噴煙を上げ、溶岩が流出して川をせき止めるなど、火山活動をしていたのです。その他にも、「不二」、「不死」などの表記が見られますが、「富士」と表記されるようになるのは平安時代になってからのことでした。

万葉の歌に「燃ゆる火」とあるように、その頂からは噴煙が上がり、「（古）せの海」が溶岩流により分断され、湖は三つに分かれていました。富士五湖になったのは、万葉集が完成して約一〇〇年後の貞観の時代の一連の大噴火、大地震、大津波が起こった時のことなのです。

当時の庶民の暮らしのドキュメンタリー

当時の悲惨な農民たちの暮らしぶりは、山上憶良の有名な長歌「貧窮問答歌」（巻五・八九二）に見ることができます。「貧窮問答歌」は、文字通り万葉びとの暮らしのドキュメンタリーであり、憶良は、当代一のドキュメンタリストと言っても過言ではありません。

たとえば、現在のレートに置き換えると、太政大臣は年収三億円、召使い一〇〇人でした。下級役人は年収二三〇万円、庶民は収入なし、になります。

戦時中、万葉集はどのように使われたか

戦地で青春を過ごす若者にとって、「万葉集」はまさに「青春の書」でした。

日本文学者のドナルド・キーンさんは、アメリカ海軍の日本語学校に入学、海軍情報士官として日本人捕虜を尋問、持ち物検査に当たった時、捕虜たちが最も多く持っていた本が「万葉集」だったことを鮮明に覚えているといいます。

ノンフィクション作家の辺見じゅんさんは「内地の恋人との間で、数字を書いた葉書のやり取りが行われた」という話をしてくれました。恋歌の歌番号で互いの気持を伝えあっていたのだそうです。

作家の阿川弘之さんが、出征の時持って行った一冊の本が「万葉集」の文庫本でした。広島の家は原爆に焼かれ、残った蔵書はこの一冊だけ。今も大事に持っているそうです。阿川さんは、その文庫本を手に「内地の友人から送られた万葉集のカタクリの歌の絵葉書に慰められた」と語ってくれました。

そう、万葉集は日本の宝……富士山と同じように、日本の文化遺産なのです。

（講演会で配布されたパンフレットと講演から再構成させていただきました）

『花子とアン』を100倍楽しむ〝花子と甲府〟

昭和61年に発行された小冊子

現在放送中のNHK連続テレビ小説『花子とアン』。
今作は、山梨出身の主人公安東はなが、女学校で勉強するため上京し、
やがて「赤毛のアン」など児童文学の翻訳に人生を捧げる物語。
そのモデルとなった村岡花子の、あまり知られていない「甲府時代」を、
本誌30ページにもご登場いただく、水木亮こと望月弘美先生が著した
『郷土史にかがやく人々第16集 村岡花子』
（青少年のための山梨県民会議編）をもとにご紹介しましょう。

辞世の歌を七歳で詠んだ花子

村岡花子は明治二六（一八九三）年、甲府市寿町で生まれました。生家は現在の県民文化ホールの西側、今もひっそり残る小さな神社のあたりだったといいます。花子は三、四歳のころ一家で上京するまでここで育ちました。

のちに大きく開花する花子の将来に大きな影響を与えたのが、この家の家主であり、教育者であった山田弘道でした。「花子」という名前も、温厚篤実で、熱心なクリスチャンだった弘道の人柄にほれ込んでいた父・逸平の強い希望で、弘道がつけたとのことです。

上京後、花子は品川の小学校に入学しますが、三年生のときに大病にかかり、そこで詠んだのがドラマでも紹介された〝辞世の歌〟。

「まだまだと思いて過しおるうちに
はや死の道へ向うものなり」

ドラマの設定とは異なりますが、花子がこの歌を、わずか七歳で作ったのは事実です。「おそらくここで逸平から山田弘道に相談があったのではないか」と水木氏はいいます。弘道は自分の娘たちを、自らが教鞭を取っていた山梨英和ではなく、東洋英和女学院に入れていました。教師になるためには文部省の認定校でなければならなかったためです。村から旧制中学や女学校にいけるのは、せいぜい村長か地主の子どもくらいという時代。それでも弘道の懸命な努力により花子の東洋英和への入学が実現するのです。

山梨英和の英語教師

その間のことはドラマにお任せするとして、大正二（一九一三）年三月、東洋英和を卒業した二〇歳の花子は、大正三年に山梨英和女学校の英語教師として、再び郷里山梨の地を踏みます。

その後五年間を甲府で過ごしますが、その間生徒と一緒に寄宿舎に住み、ホームシックで泣いている生徒たちを旧約聖書やおとぎ話などをして慰めたこともあったようです。また、生徒たちと『さくら貝』という歌集を出したり、雑誌『少女画報』に小説を寄稿していました。

「わたしの青春は甲府にある」

そして大正八年、花子は子ども向けの本の編集者になるために、英和を辞め再び上京。村岡儆三と結婚します。

『赤毛のアン』原著との出会いは昭和一四（一九三九）年。戦渦の中、当局の厳しい目を避けながら翻訳作業が続けられた本書が世に出たのは昭和二七年のことでした――。

その後、昭和四三年一〇月に亡くなるまで花子は山梨へも何度も講演に訪れていますが、この二度の甲府時代には明らかに花子の文学の萌芽を見て取れます。

「薄紫のブドウにはさまざまの若い歳月の思い出がこもっている。今になってこれを味わうと、遠く過ぎ去った若い日の喜びや悲しみがまざまざとよみがえってくる。これらの思い出は主として甲州につながっている。結婚前の若い歳月を女学校教師として過ごしたのが甲府で、いわばわたしの青春は甲府につながるといってもいいだろう」（随筆集『生きるということ』より）

水木氏はそんな花子の文章を引いて、「児童文学、青春の文学に一生を捧げた村岡花子の歩みは、根底に甲州の風土をふまえながら、着実に、しかも粘り強く切り開かれた」と書いています。

甲府市内「山梨プラザ」にある記念撮影コーナー

おまんとう、へえ忘れちまっつら甲州弁!

おなじみNHK連続テレビ小説。前々作『あまちゃん』では「じぇじぇじぇ」が大きなブームとなり、流行語大賞にも選ばれました。現在放送中の『花子とアン』でも、甲州弁のセリフがたくさん登場しています。東京同窓会の皆さんは、郷里を離れて久しく、なかにはふる里の言葉を忘れている人もいるのでは？　日本一ブサイクな方言だといわれようとも、やはりわれらが愛すべき甲州弁。この機会に一度、思い出してみませんか？

【あ】

ありっかねぇ　あるわけない。
「ほんなこん、―じゃん！」
（そんなことあるわけないでしょ！）

いいさよぉ　いいんだよ！
「ほんな心配しんで―」
（そんな心配しなくていいんだよ）

いかざあ　行こう。
「へぇ、―」
（もう行こう）

いくじ　何時。
「今―で？」
（今何時ですか？）

いくじ　度胸。
「―がないじゃんね」
（度胸がないですね）

いっさら　全然。
「おまん―わかっちゃいんら！」
（あなた全然わかってないでしょ！）

うっちゃる　捨てる、どかす。
「早く―っとけし」
（早く捨てておくんだよ）

うてげえし　言い訳。
「おまん、―しちょ」
（お前、言い訳をするな）

えらい　疲れる。
「本当に―よ！」
（本当に疲れたよ！）

えらい　ものすごい。
「本当に―できた娘だね」
（本当にものすごくできた娘ですね）

【か】

かじくる　掻く。
「そんなとこ、―っちょ」
（そんなところ掻くな）

がとう　たいして。
「―のこんじゃないじゃん」
（たいしたことじゃないよ）

～け　～しますか、～ですか？
「そろそろ行く―？」
（そろそろ行きますか？）

けける　乗せる。
「これ、棚に―といて」
（これ、棚に乗せておいて）

げっぴ　びり。最下位。
「運動会のとびっこで―になっちまった」
（運動会のかけっこで最下位になっちゃった）

こく　言う。
「嘘―いちょし！」
（嘘言うなよ）

こぴっと　しっかり。ちゃんと。
「東京行っても―がんばるだよ！」
（東京に行ってもしっかりがんばるんだよ！）

【さ】

～し　命令形になる。
「久しぶりじゃん。ちっと寄ってけ―」
（久しぶりだね。ちょっと寄っていきなよ）

～しちょ　～したらダメだよ。命令形よりやわらかい言い回し。
「ほんなこん―し」
（そんなことしたらダメだよ）

～じゃん　～ですね。
「おまん、ずでえばか―」
（君は、すごいばかですね）

しわい　生意気。
「おまん、本当に―やつだな」
（お前、本当に生意気なやつだな）

～ずら　～でしょう？だろう？
「ほぉいうこん―？」
（そういうことだよね？）

せえたら　余計なお節介。
「―こいちょし」
（余計なお節介をやくなよ）

【た】

ちみくる　つねる。
「―っちょ」
（つねるな）

ちゃくい　ずるい。
「ほんな―こんしちょし」
（そんなずるいことをするなよ）

～ちょし　～しないほうがいい。
「ほんなだっちもねぇこん言っ―」
（そんなくだらないこと言わないほうがいいよ）

ちょびちょび　調子に乗る。
「あんまり―しちょ」
（あんまり調子に乗るな）

てっ　感嘆の言葉としてとっさに出る語。
「―！すごいじゃん。おまんが作っただけ～？」
（へぇ！すごいじゃない！君が作ったの？）

【は】

はんで　大いに。
「―飲めし、食えし」
（大いに飲んで、食べてください）

ぶちゃる　捨てる。
「この服はもういらんから―」
（この服はもういらないから捨てる）

ぶんだす　出かける。
「へえ―さざあ」
（そろそろ出かけましょう）

ほうけ　そうですか。
「―！全然知らんかった」
（そうですか！全然知らなかったよ）

ほんなこん　そんなこと。
「―言っちょし！」
（そんなこと言うなよ！）

【ま】

まっと　もっと。
「いっさら飲んじゃいんじゃん。―飲めし」
（全然飲んでないね。もっと飲みなよ）

みぐさい　みっともない。
「そんな―まねしちょ」
（そんなみっともないまねするな）

ももっちい　くすぐったい。
「ここ、―？」
（ここ、くすぐったい？）

【や】

やせったい　落ち着きがない。せわしない。
「このぼかぁ―じゃんね、ちったぁ座ってろし」
（この子は落ち着きがないね、少しは座っていなさい）

やぶせったい　わずらわしい。動作的にうるさい。
「さっきから一匹―ヘエが飛んでるだ」
（さっきから一匹うっとうしいハエが飛んでるんだ）

よたっこと　悪いこと。
「このぼこは―ばっかして！」
（この子どもは悪いことばっかりして！）

【ら】

～ら　～でしょう。～ですね。
「行く―？」
（行くでしょう？）

【わ】

わにわに　ふざける。
「授業中に―しちょ」
（授業中にふざけちゃいけないよ）

平成26年度当番幹事　昭和51年卒業生

先生。今、どうされていますか？

～恩師の方々から～

今年の当番幹事である昭和51年卒業生が一高を巣立って、はや40年もの月日が流れました。
ここでは、当時の担任や担当の先生、特に我々が三年次にお世話になった
先生方の近況や思い出、メッセージをご紹介します。
懐かしい顔、懐かしい声、懐かしい言葉……。思い出すと、一気にあの頃に戻ったような気がしませんか。

強行遠足の思い出

高橋保明 先生（九十一歳）
学年主任　担当：英語

甲府一高の「強行遠足」は、全国高校間の話題の一つになっているようだ。昨年まで甲府一高に勤務していた息子からそのようなことを聞いた。その有名な「強行遠足」は私の思い出の一つでもある。

学年主任としての初参加の年、副主任と二人で実地体験してみた。夜間、暗闇の中を〝お化けが出てきそうな感じ〟で歩いた苦い経験が未だに思い出されて、〝ゾクッ〟とする。

終点の一つ手前の駅に着いた時、生徒の親たち三人が焚き火を囲んでいた。その仲間に加えてもらった。小ビンのウイスキーを一口、二口飲んだあと、駅で電車の発車時刻を確認し戻ってみると、小ビンは空っぽになっていたのが恨めしく思い出される。

終点に到着した途端、倒れ伏してしまう生徒を介護していると、強行遠足は度を越しているように思われてならなかった。しかし、度を越したこの困苦を経験した生徒たちにとっては、その後の人生の〝糧〟となることは必定であろう。

思い出のワン・ショット

石倉正身 先生（七十八歳）
三年一組　担当：英語

私が甲府一高にお世話になったのは、昭和四十八年から五十四年までの六年間と、二度目は平成四年から六年まで（この間旧校舎の解体と新校舎の落成に教頭として立会うことができた）の二年間、計八年間だった。

ある教育学者は、教師としての適齢（仮説とその人は断っているが）は、「生徒と先生の年齢差は二十年以上四十年以内が望ましい」と述べている。私にあてはめると、何とギリギリの年齢差だったことになる。こんな私にもかかわらず、皆さんは立派にそれぞれの道を歩んでくれた。

昭和五十一年三月、卒業式が終って最後のホームルーム、各自に卒業証書を手渡して、保護者、生徒、そして私と全員で合唱した「忘れな草をあなたに」は忘れることの出来ないワン・ショットである。

会員の皆様方のご健勝を祈っています。

北の旅

小林仁一 先生（七十七歳）
三年七組　担当：理科（生物）

東京同窓会開催をお祝い申し上げます。

私は、一高と南高との二校総合選抜の始まった昭和四十三年に理科（生物）の教員として南高から転任して来ました。私の教員生活の大半を過ごした一高は、皆様と同様に、私にとっても人生の一つの母校になっています。

定年後は、北杜市の生家にて帰農生活をしています。数年前、茗渓駒場会同級生二十名程で北海道旅行をしました。その折、北大や札幌羊が丘展望台公園でクラーク博士の胸像や立像を見て、皆で我らが若き駒場青春時代を想い出し、感動し合いました。その時、私はクラーク博士の言葉の前半部（ボーイズ ビー アンビシャス）が一高の校是の一つになっていることを重ね合わせ、更に強い感動を覚えました。

昨年、喜寿を迎えた私ですが、クラーク博士の遺訓の後半部をも心に留めながら、側条施肥機付きの乗用田植機に乗り、夢見の稲作に励んでいます。

一高同窓生皆様のご活躍を期待しています。

過ぎし日を振り返って

浅川達雄 先生（八十三歳）
三年九組　担当：社会科（日本史）

私は現在八十三歳です。最近、自分でもよくここまで生きてきたなと感じています。私達の世代は戦中、戦後の厳しい環境の中で青春時代を過ごし、食糧事情も極めて悪い状況下で育ったので、とてもこの年齢まで生きるとは思っておりませんでした。そういう訳で余生を大事に生きていこうと思っております。

甲府一高在職中は社会科の中の日本史を担当していました。私の専門科目は早稲田大学大学院商学研究科で会計学を専攻し、税理士の資格をもっておりますので、最初の赴任校甲府商業高校では商業科の授業を担当していました。しかし当時普通科高校へ進学する生徒が多かったので、県教委から社会科への転科を要請されました。大学時代に社会科の免許は取得していました。

甲府一高には九年間在職しましたが、伝統のある素晴らしい学校です。どうか、皆さん母校を誇りにして頑張って下さい。

近況報告にかえて

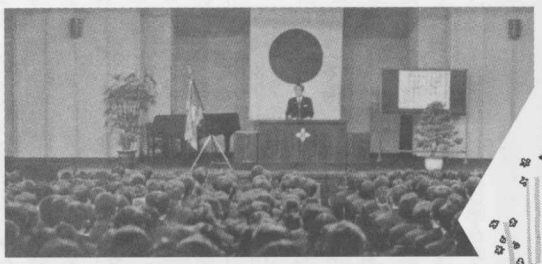
田中資時 先生（七十三歳）
三年十組　担当：保健体育

教員生活のなかで、母校甲府一高に通算十六年間奉職したことは、充実した教員生活を送れた礎になりました。遠隔地勤務を終え、再び母校に戻った時、五一会の皆さんとの出会いがあり、その時三年十組の担任として、一年間共に熱く過ごすことができました。

卒業以来三十八年間、毎年クラス会を開催して、心の通いあった交流が続いています。今年の正月も幹事さんの配慮により、教師冥利に尽きる思いをいただいたところです。

退職後第二の人生をスタートした時から十二年間、階段運動・ストレッチ・山坂歩き等の運動実践の継続に心掛けて来ました。その結果、富士山登山三回、古希を迎えた一昨年には北岳、昨年は奥穂高岳と日本三高峰に登頂しました。

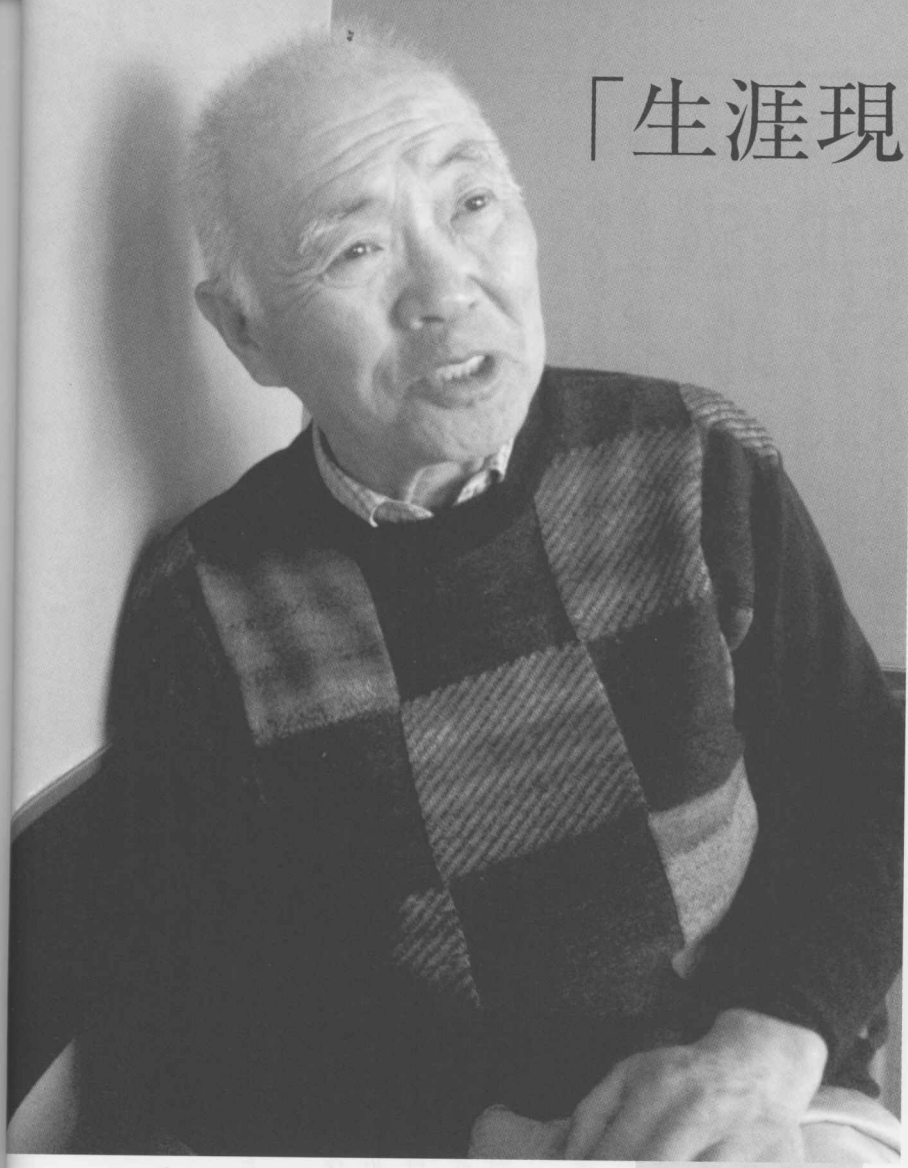
三浦雄一郎氏曰く、「目標を立てて準備を怠りなく継続すれば夢は叶う」を実感しましたし、「元気だからやるのではなくやるから元気なんだ」このことばもかみしめているところです。



入学の日

「先生!いろいろお世話になりました」

1976年
卒業アルバムから



「生涯現役」という生き方

望月先生は昭和47年から6年間、
国語の先生として一高の教壇に立たれていました。
その後「水木亮」という筆名で、
小説家として「織田作之助賞」を受賞されたり、
退職され72歳を迎えた現在も地元の劇団を主宰し、
劇作家として活躍されたりと、まさに〝生涯現役〟。
そんなバイタリティの源泉をうかがえればと思います。

望月弘美 先生

（昭和51年卒業時・3年4組担任）
Hiromi Mochizuki

――そもそも劇作に興味をもたれたのはどういう経緯だったのでしょう。

高校時代に、たまたま放送部のために放送劇を書いたことがきっかけです。その後、大学3年のときに応募した、雑誌『シナリオ』のシナリオコンクールで佳作に選ばれて、大島渚に「面白い」と、ほめられちゃって。それでのめりこみました。教員になってから退職まで、異動はありましたがずっと高校演劇の顧問をしていました。

家の事情で一高から、別の高校の定時制に移るのですが、そこの生徒がまた（悪い意味で）大変でね（笑）。でも、男の子も女の子もものすごくパワーがある。それで、この子たちで芝居やったら面白いんじゃないかと思ったんです。それで甲府刑務所の500人の受刑者の前で上演したら、とっても感動してくれて、NHKが「関東ローカルだけど放送したい」って話になって。

そんなことがきっかけで「劇団コメディ・オブ・イエスタデイ」を立ち上げたのは昭和58年です。以降30年、山梨の歴史にかかわる事件・人物について私がシナリオを書いて、上演を続けています。

――小説はいつごろから？

小説はずっと書いていましたが、一高で教えていたときに『小説ジュニア』という雑誌の最終選考に残って、掲載されました。「小説なんか書いているから、ろくな受験指導ができないんだ」なんて、嫌味を言われたこともありました（笑）。

でも、そのうちに書き手にどんどん女性が多くなってきたんです。それで、小説っていうのは女性のもので、男が書くというのはちょっとちがうぞという気がして。それよりも、芝居の台本を書くほうが自分にはやはり合っていると。それで一度小説から離れることになります。

そして、平成11年、25年ぶりに書いた『祝祭』という作品で織田作之助賞をもらいました。一昨年には最新小説集を上梓しました。

――郷土史家としても知られる存在です。今話題の村岡花子についても書かれていますね（※26ページ参照）。

それで頼まれて書いたのが『郷土史にかがやく人々第16集』（青少年のための山梨県民会議編）に収録された村岡花子の項です。もう30年も前のことですが。

――今まで生きてきて、これが最高だったというのはなんですか？今後これをやりたいというのはありますか？

やはり芝居ですね。山梨でいちばんの美男美女を、自分の書いた台本の役者として使って芝居ができるんですから。これって最高じゃないですか。

この先は、執筆や演劇活動と並行して、5年間エッセイ教室をやってきて集まった大量の原稿があるんです。それをどうにか世に出していきたい。その蓄積をしていきたいですね。

――最後に、現役の一高生にメッセージをいただけますか。

高校時代というのは、もちろん勉強は大切ですが、基本的な勉強はしつつ、今の時期に「これをやりたい」「こうなりたい」ということを見つけることだと思います。それはどんな道でもいいから〝オンリーワン〟を目指してほしい。

勉強が好きな人は勉強で、勉強は嫌いだけど絵を描くとか、スポーツが好きとか、販売員でもタクシーの運転手さんでもいい。日本一になんかならなくていいんです。例えば甲府でオンリーワンになればいい。自分はこれでそこを目指すぞっていうもの。それをぜひ今のうちに見つけてください。

――元国語教師としてのアドバイスもいただければ。

ひと言でいえば、「本で人生は変わる」ということですね。貧しかった村岡花子は、本をたくさん読むことで、そのコンプレックスを跳ね返したんです。

図書館や本屋さんで自分が選ぶ本以外でも、いい先生、いい先輩、いい友達がいれば「この本、いいぞ」と紹介してくれます。

そこで大切なのは、それがどんなに興味のない分野であってもためらわず挑戦してみるということ。「読んでみろ」といわれたら、自分の間口を広げて試しにいろいろ読んでみてほしいです。今は目に見えない〝栄養〟が、いずれ必ず力になります。「これいいよ」っていう、人の言葉を大事にしてください。

演技指導する望月先生（中央）

難病のこども達に〝生きる歓び〟を

特別寄稿

小児科医 **小口弘毅**（昭和45年卒業）Kouki Oguchi

詳細：おぐちこどもクリニック　http://oguchi-ped.cside.com/yume/aozora.pdf

私は、今、偶然の積み重ねで北杜市白州に難病のこどものキャンプ場造りに兄弟3人で協力しています。そして相模原市で開業している小児科医です。兄弟3人とも甲府一高で学びましたが、これも偶然でした（博司・47年卒、均・51年卒）。それは私が入学した翌年から、総合選抜方式に変わったからです。一高での高校生活は、平凡な受験生の生活だったように思います。中学時代に打ち込んだハンドボールを部活に選んだのですが、1年生の後半に辞めてしまいました。交友関係もそれほど広くなく、青春を持て余し気味でした。

3年生の夏休みに甲子園決勝で延長18回まで投げ抜いている三沢投手をテレビで見ていて、同じ高校3年生なのに自分は何も熱中しているものがないと思った事は覚えています。強行遠足も何とか完走できて良かったというくらいで、卒業とともに記憶の彼方に霞んで行きました。虫が好きで、ファーブル昆虫記をこどもの頃全部読みました。私は理数系ではないと自覚していましたが、生物学か医学ならできるかなと思い医師の道を選びました。

高校時代は山にはまったく関心はなかったのに、医学生になってから山登りを始めて山の虜になってゆきました。恐らく強行遠足の、何事かにチャレンジし、耐え忍ぶ体験の延長線上に登山があったのでしょうか？　日本の屋根と称されるアルプスのほとんどに四季を通じて冬にも登りました。穂高や鹿島槍もすばらしかったけれど、やはり南アルプスの雄大さ、アルペン的な南八ヶ岳、森と湖の北八ヶ岳、そして甲斐駒ケ岳の渓谷美にも魅せられたのです。

その頃、登山の際に小淵沢周辺を良く通りかかり、この地域はアルプスのようだなと感じました。卒業して30代前半にこども達を連れてカリフォルニアに留学したときも4000m級の山々が聳え建つシエラネバダ山脈にも家族でキャンプをして、その美しさに感動しましたが、それでも山梨の森林に覆われ、深い渓谷に刻まれた山々は美しいと思いました。

迷わず小児科医の道を選び、その中でも生まれたばかりの赤ちゃんを治療する救命救急的要素が強い新生児医療を選択しました。当時はアメリカで発展した新生児学が導入され、日進月歩の勢いで新生児医療は発展し、重症な新生児が助かっていきました。

若かった私は、赤ちゃんの命を救っているという思い上がった考えを持つようになりました。しかし、新生児医療は赤ちゃんの生命力にほんの少しの援助を添えるに過ぎないと今は思っています。確かに以前は救えなかった多くの赤ちゃんが助かって行きましたが、しかし障害を持って退院して行くこども達も確実に増えていきました。また治療医学の手が届かない先天性の病気も多く、次第に退院後のこども達の成長発育に力を注がなければならないと思うようになりました。

仮死で生まれ重度な脳性麻痺となった女児のお母さんが、退院直後の夜に新生児集中治療室（NICU：neonatal intensive care unit）に私を訪ねて来ました。「私達はこのような重度の障害を残したわが子をどう育てたらいいかわからない」と訴えたのです。私は返す言葉がなく、ただ涙を流す母親を見つめるだけでした。この若いお母さんは、その後に障害児教育の大学院博士課程にまで進み、現在は大学で障害児講座を受け持っています。また10年ほど前に、重度な脳性麻痺の娘さんをつれて障害児キャンプに参加し、障害児が自然溢れるキャンプ場で生活する意義について私に教えてくれたのです。

2000年に48歳で小児科を開業しましたが、長く重症新生児の治療に当たってきた私は、NICU退院児の成長発達を支援するクリニックを運営しようと心に決めました。こどもの発達支援を専門とする一人の臨床心理士にお願いして一緒に発達外来を始めました。新生児医療は非常に進歩しましたが、退院後に十分な支援が受けられない多くのNICU退院児が受診するようになりました。数年もすると、それ以上に増加している発達障害児も診断、そして療育を求めて受診し、年々発達外来スタッフも充実させてきました。日本の医療は病院や医療機器はどんどん発展しており、これをハード面の発展と捉えると、退院後の地域での成育支援はソフト面であると言えますが、このソフト面は欧米に比べて非常に劣っていると開業医として思うようになりました。

図1 キャンプ場完成予想図

私は幅広い障害を持ったこども達の成育支援を多くのスタッフの力を借りて実践しています。そして重度な障害を持ったこどもほど、家族の負担は大きく、そして病院と家の往復だけという単調な生活をしていると痛切に感じていました。3年ほど前に、難病のこども支援全国ネットワーク現会長の小林信秋さんという人から、あるプロジェクトに協力してほしいと依頼されました。それは、何とわが故郷山梨県の北杜市白州に難病のこども達の為のキャンプ場を作るという夢のような計画でした。この計画の為に「みんなのふるさと夢プロジェクト」実行委員会が2011年7月に結成されました。

実行委員長の仁志田博司（東京女子医大小児科名誉教授）は新生児学の恩師です。またも偶然ですが、実行委員の中に同窓生である新津直樹さん（小児科医、37年卒）、田伏純子さん（難病のこどもの母親、44年卒）もおられ、一高パワーを感じました。

現在白州の森は伐採整地されて、こども達の宿泊施設として自然木で出来た山小屋が1棟建てられ、今後数年かけて次々と山小屋が全部で7棟建てられて行きます（図1）。

私は2人の兄弟にも声をかけ、共に実行委員として重要な役割を担ってくれています。このプロジェクトの道は遠く険しいと思いますが、プロジェクト結成からわずか3年でかなりの寄付金が集まってきています（もちろん全ての建物が完成するには数億円のお金が必要で、その何分の一にも満たない金額ではありますが）。

それはやはり最愛のこどもを難病に冒され、そして失った壮絶な体験をした親達が立ち上げた会である難病ネットの実績であり、世の人々の後押しがあったからだと思います。夢に向かってまず一歩踏み出し、一歩一歩高みを目指す登山のように、必ずや達成（山の場合は登頂）できると信じていますし、委員達は皆前向きに困難に取組んでいきます。難病は〝life shortening illness〟とも言えます。短い命を燃焼させて、〝生きる歓び〟を味わってもらうように私達大人は出来る限りの事をすべきではないでしょうか？

このプロジェクトの広報活動の一環として、私達は新緑チャリティーウォークを行っています。2013年度からJR日野春駅から白州キャンプ場までの12キロを歩いて寄付を募っています（今後毎年4月最後の土曜日に固定）。今年は快晴の中180人を超える賛同者が歩きましたが、多くの一高の同窓生が参加し、ウォークを楽しんでくれました（写真）。このように強行遠足はチャリティーウォーク、さらには夢プロジェクトにも繋がっていると私は感じています。

これからは高校生も含めて、より多くの同窓生がウォークに参加し、将来熱心なサポーターになってもらいたいと願っています。私は無名の市井の小児科医ですが、それでも上述したような様々な偶然に出会って人生を送ってきたように思います。偶然ではなく必然であったのかもしれません。

新緑ウォークでの同窓会

努力と継続は力なり

特別寄稿

三菱重工業株式会社 プラント技術課主席技師
小宮山正仁（昭和51年卒業） Masahito Komiyama

学生のみなさん、今の生活で電気の無い生活を想像できますか。2011年の東日本大震災の直後には、計画停電で電気の無い生活の不自由さ、不便さを実感したことと思います。日本では、電気は当り前のようにあり、夜間でも明るい部屋で楽しいテレビを見て過ごしています。しかし、世界の中には停電が頻繁に発生し、夜は薄暗い中で生活している人がたくさんいます。

私の仕事は、大きなディーゼルエンジンを使って発電する設備を設計することです。写真は今年、パラオという国に納めた発電所の工事の時のものです。この発電所は日本のODAとして日本の政府からパラオの国に無償援助という形で供与されたものです。私はこの工事では、会社のプロジェクトマネージャーとして、プロジェクト全体を管理して、最終的にパラオの電力庁へ引き渡しをするという役務を担ってきました。

パラオという国は、グアムとフィリピンの中間くらいにある、数多くの島から成る国で、人口は2万人程度です。景観はすばらしく世界遺産に登録されています。最近では、日本からスキューバダイビングを楽しむ観光客が大勢訪れています。しかしながら、この国の産業と言えるものは少なく、観光収入が主な歳入であり、国としては貧乏国です。既存の発電設備は、かなり老朽化したディーゼルエンジンで、計画停電が常態化していました。

今回、弊社が納入した設備は10MWで、国の平均の電力需要がMax.12MWなので、これで計画停電をすることなく、パラオの人々の生活に大きく寄与できたものと思い、非常にうれしく思っています。機械商社のアルベックス社や輸送を担って頂いた後藤回漕店には感謝しています。また、仕事上、潤滑油を扱っている巴商事にも同様です。

昭和51年に甲府一高を卒業し、東工大・院を卒業し、三菱重工業という会社に入りました。傍目からすると順風満帆に見えますが、会社に入ってから壁にあたりました。モヤモヤ感を抱きながら仕事をしていくうちに、最初の海外出張で西アフリカに在るリベリアという国に行きました。その仕事も日本政府のODAでした。そこでカルチャーショックを受けました。

夜リベリアの空港に到着すると、出口に大勢の黒人がいて、私のスーツケースめがけて大声を上げながら近づいてきました。タクシーの運転手達がわれ先に客を得ようと喚いていたのです。闇夜の中で薄明りに黒人たちの目と歯と手のひらだけが浮かんでいて、暑さと異様な臭いと怒号・喧騒の中を歩いて駐車場に行きました。その時は、何と凄い所にきたものだと感じました。

ワーカー達の昼食は、現地の会社が支給していました。1mくらいのタライにご飯・汁・魚が一緒くたに入っていて、昼食係がそれを頭に載せて持ってきて、昼食の号令を掛けると、どこからともなく、大勢のワーカーが集まってきました。そして、そのタライの周りに車座になって、一斉にタライの中のものを手を使って食べ始めるのでした。横で見ていたら、お前も一緒に食べないかと言われましたが、日本人からすると残飯みたいな臭いがして、とても食べられないと感じて丁重に断わりました。

現地人は日本人に対して、非常にフレンドリーで、いつもエネルギッシュで、大声を張り上げて笑っていました。着る服も食べるものも粗末なのに、彼らを見ていたら、日本人は何と幸せで、それまでの悩みは何と些細なものかと感じました。この感慨から、今自分でできることを精一杯やればいいのだと感じ、〝自分流〟で努力していこうと決めました。

日本は敗戦後どん底の状態から這い上がり、現在は豊かな国になっています。これからは人口が減り、高齢化社会になっていきます。日本の国力を維持していくためには、若い人たちのがんばりに掛かっています。これからは、日本の中だけではなく、世界に出て行って、今まで以上に世界の人たちと仕事をしていく必要があります。

現在の日本のエネルギー問題では、原子力の停止に伴い、火力発電の燃料の輸入額が高額となり、日本は貿易赤字となっています。火力発電では、石炭、石油、天然ガスなどが使われていますが、京都議定書などのCO_2削減からいえば、天然ガスが有効な燃料です。

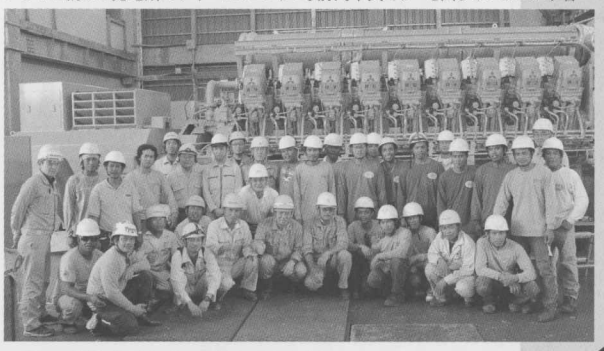
しかし、日本は島国なので、この天然ガスを輸入するには、LNGという液体の形で持ってくる必要があります。現在、LNG価格は、アメリカの5～6倍近い価格で購入しており、これが貿易赤字の原因となっています。将来的には、安くなる予測ですが。

弊社は、天然ガスを使った分散型電源となりうるガスエンジン発電設備もあり、現在私は、その仕事も行っています。同じ職場では、一高を平成15年に卒業した細田信太郎くんもがんばっています。

最後に、若いみなさんも将来の夢に向かってがんばってください。

日新鐘

パラオに納めた発電所のディーゼルエンジン。前列中央でグーを出しているのが筆者



「日新鐘」題字の人

米山啓水

旧姓名 山田啓子
Keisui Yoneyama

進路に迷っていた高校時代、先生方の「ガンバレ！」の言葉に後押しされ書の道を志すことにしました。急がず休まず、夢をつないで40年……。当時思い描いていた未来にはまだまだほど遠いのですが、これからも、子ども達の書写教育のレベルアップに尽力するとともに、墨色とにじみと、かすれにこだわった作品を書き続けていきたいと思います。

略歴 昭和51年卒
筑波大学芸術専門学群
美術専攻 書コース卒業

主な受賞歴 毎日書道展 毎日賞
やまなし県民文化祭
優秀賞（実賞）

現在 山梨県書道会理事／やまなし県民文化祭委嘱／山梨県書作家連盟会員
山日YBS席書き大会審査員／朝聞書会審査会員／東方書道院同人
駿台甲府小・中学校／山梨県立大学非常勤講師

第三回やまなし県民文化祭・書道展

優秀賞・実賞 「樹」 米山 啓水

(90×120cm)